

第三章 樺太問題及樺太千島交換條約ノ締結

一八五三年露國カ樺太侵略ニ著手シテ以來樺太問題ハ我領土ノ保全喪失ニ關スル帝國最大ノ憂患トナリ帝國ノ對露外交ノミナラス一般對外交渉ノ最重要ナルモノトナレリ。

樺太ノ所屬問題ニ關スル日露間交渉ノ經過ヲ觀ルニ、樺太カ露人渡來前既ニ我所領タリシコト明カナルニ不拘一八五三年渡來セル露使「ブチャチン」提督ハ同島南端ノ一部ヲ日本所領トスヘシトテ我方ノ北緯五十度分界ノ主張ヲ容レザリシヲ以テ、下田條約ニハ樺太ニ於テハ分界セス從來ノ仕來通りト規定スルニ至レリ。下田條約ノ締結及英佛トノ戰爭ニ依リ露國ハ一時樺太ノ陣營及露人ヲ引揚ケタルモ翌年再ヒ移民及軍隊ヲ送り來リ、我國内ノ變革騒亂及國力未タ伸張セザルニ乘シ其要求ヲ増大シ、一八五九年東部西伯利總督「ムラビヨフ」將軍ハ支那ヨリ「アムウル」地方ヲ獲得セル餘威ヲ以テ艦隊ヲ率テ江戶ニ來リ、樺太ハ元支那領タリシ「アムウル」地方ノ一部ヲ成スモノナレハ當然全島露領ナリト主張シ天然ノ界タル宗谷海峡ヲ以テ境トスヘキヲ求メタリ。次テ一八六二年竹内下野守カ露都ニ赴キ五十度ヲ以テ分界セント申入レタル際露國全權「イグナチエフ」將軍ハ四十八度ノ久春内ニハ露國陣營アルヲ以テ同所以北ニ於テハ境界ヲ定メ難シトテ我提議ヲ拒絕シ、其後小出大和守カ露都ニ於テ四十八度迄讓歩シテ分界シタシト提議セルニ對シテモ露國側ハ「ムラビヨフ」以來ノ同島占領ノ方針ヲ固持シテ分界ヲ好マス、樺太全島ヲ露領トシ其代リニ得撫島及其附近三小島ヲ讓ルヘシ、若シ日本カ右受諾出來サルニ於テハ從來通り樺太ハ兩屬トナシ置ク外ナシトテ應セス、其後一八七二年遂ニ東京ニ於ケル談判ノ際我方ハ樺太買収案ヲ持出シタルモ成立セス、遂ニ一八七五年露都交渉ノ結果樺太千島交換ヲナ

スニ至リテ樺太問題ハ漸ク解決シ於茲帝國北邊ノ憂患ハ一應去リタリ。
右交渉ノ経緯ニ付次ニ概説ス。

七八

第一節 樺太境界確定問題

第一項 我方ノ樺太分界提議

樺太ニ於ケル日露兩國境界確定問題ニ關シテハ日露修好條約締結交渉ノ際長崎及下田ニ於テ我方全權ト露國使節「ブチャチン」トノ間ニ論議ヲ重ネタルモ同條約ニハ樺太ニ於テハ境ヲ分タス是迄ノ仕來通日露人雜居ノコトト規定セリ。然ルニ久春内露國陣營ノ如キハ右語合ニ依リ一旦引拂ヒタルモ露國軍隊及移住民ハ安政三年（一八六五年）再ヒ來リテ家屋ヲ建築シ、翌安政四年六月露人「ロダノスキイ」等ハ「アメリカ」號ニテ西海岸名寄ニ來リ久春内ヲ經テ真縫ヲ視察シ八月北方ニ去リタルカ、安政五年（一八五八年）六月「マレガツフ」ノ一隊久春内ニ移住シ、次テ翌年二月其一部ハ真縫ニ移リ營舎ヲ建テ更ニ南下ノ勢ヲ示セリ。

於茲安政五年七月箱館奉行堀織部正ハ江戸ニ於テ通商條約締結交渉ノ爲來朝セル「ブチャチン」ニ對シ右露人建築ノ小屋引拂方及樺太境界問題ニ關シテ交渉セル處、先方ハ名寄邊へ建テタル小屋ハ取毀シテ差支ナキモ境界問題ニ付テハ今回ハ同問題交渉ノ爲來リタル次第ニ非サルヲ以テ歸國ノ上政府ニ報告シ明春ニモ交渉スヘシト答ヘタリ。次テ安政五年十月堀織部正及村垣淡路守ヨリ幕府ニ對シ、近日露國領事ノ箱館來任ヲ俟テ箱館奉行ヲシテ樺太ノ境界ヲ北緯五十度トシ其以南ノ露國人ハ一切退去セシムル様交渉セシメ、領事ニシテ之ニ應セサレハ老中ヨリ書翰ヲ以テ又ハ使節ヲ送リテ露國政府ト交

涉アリ度旨稟請セル結果、安政六年三月幕府ハ箱館奉行竹内下野守及津田近江守ヲシテ新任露國領事「ゴシケグイチ」ニ對シ兩國境界問題ニ付交渉セシメタルカ、露國領事ハ其權限ナシトテ之ニ應セザリキ。

然ル處同年五月二十三日東部西伯利總督「ムラビヨフ」箱館ニ入港セルヲ以テ箱館奉行ハ二十六日附ヲ以テ同總督ニ對シ、樺太日露兩國境界問題ニ關シテ從來ノ経緯ヲ述フルト共ニ「ホロコタン」ヲ以テ境トシ露人ハ其以南ニ入ルコト無キ様ニシ以テ紛争ノ種ヲ除クヘシトノ趣旨ヲ領事ヲ經テ申入レタル處、領事ハ總督ハ西伯利地方ノ最高官ナレハ箱館奉行トハ談判シ難シトテ右書翰ヲ一旦返戻シタルモ我方ヨリノ諭示ニ從ヒ「ムラビヨフ」ニ傳達スルコトナリタルカ、總督ハ總督ト同等ノ權限ヲ有スル者ニ非サレハ本問題ヲ商議シ難ク江戸ニ於テ交渉スルヨリ外ナキ旨ヲ回答シ來レリ。

第二項 「ムラビヨフ」來航ト樺太境界ニ關スル交渉

東部西伯利總督「ムラビヨフ」將軍ハ愛理條約ヲ以テ支那ヨリ黒龍口左岸ヲ取り、其餘威ヲ以テ安政六年（一八五九年）五月二十三日「フレグート」型「アスコリド」ニ坐乗シ「コルウエイト」型「ルインダ」、「グリデン」、「クリベル」型「ブラズン」、「汽船」アメリカ「號」等ノ艦隊ヲ率イテ箱館ニ入港シ、同二十日六日附書面ヲ以テ老中ニ對シ、二十七日箱館出帆朝鮮ニ使シ國境ヲ議定シ七月三日ヲ期シテ江戸ニ出テ露帝ノ命ニ依リ樺太境界ヲ協定セントスルニ付テハ日本政府ニ於テモ委員ヲ任命シ右準備ヲセラレ度旨ヲ申出テ居リタルカ、露曆八月五日品川沖ニ投錨セリ。依テ幕府ハ若年寄遠藤但馬守、同酒井右京亮、外國奉行堀織部正及村垣淡路守ヲ應接係ニ任命セリ。

邦曆七月二十三日「ムラビヨフ」ハ幕府應接係ヲ自艦ニ招待シ應接ノ後、兩國和親交易ノ條約ハ既ニ締

七九

結セラレタルモ樺太境界ノ如キ重要問題ニ付交渉ノ爲今回來船セル次第ナル處、樺太ハ「アムウル」地方ニ合マルルモノニシテ「アムウル」地方ハ這回支那トノ條約ニテ露領トナリタレハ樺太モ同様ナル旨ヲ述ヘ短時日ノ間ニ交渉シ度旨ヲ申出タルカ、我方ハ既ニ晩景トナリタレハ再會ノ上交渉スヘシトテ辭シ歸レリ。翌日「ムラビヨフ」伯ハ豪華ナル行列ヲ整ヘ芝天徳寺ヘ幕府應接係ヲ訪問シ爾後同寺ヲ宿所トシテ逗留セリ。

一、樺太境界ニ關スル談判

「ムラビヨフ」伯ト遠藤、酒井等幕府應接係トノ談判ハ七月二十六日及八月二日ノ二回天徳寺ニ於テ行ハレタル處「ムラビヨフ」ハ、「アムウル」(黒龍江)ハ「サリハン、ウラ」ト稱シ「ザハリン」島ハ二ツノ名アリテ「アムウル」ト同一ノモノナリ、同地ハ百七十年前迄ハ露國所領ナリシカ其後支那領トナリ今回ノ條約ニ依リ復テ露領トナリタレハ五年前露國ハ「アニア」ニ陣營ヲ建テタルモ出張ノ人員少ク整備出來サルニ付「ブチャチン」ニ引拂ハセ其後日本ニテ取拂ヒタルモノナリ、然ルニ同地ニ對シテハ外國ノ覬覦スルモノアルヲ以テ之カ防衛ノ爲近ク多勢ヲ送來ル豫定ニモアリ露帝ヨリ支那及日本トノ國境ヲ平和的ニ取極ムル様命令アリタル次第ナリト趣旨ヲ述ヘタリ。之ニ對シ遠藤及酒井ハ、境界問題ハ重大問題ニシテ露國カ和親ノ精神ヲ以テ之ヲ決定セントセハ我方モ同様精神ヲ以テ腹藏ナク會談スヘキモ北蝦夷地ハ往古ヨリ我國ノ所領ニシテ之ニハ確タル證據アリ、右ハ同地ノ言語風俗モ日本ノ古風ヲ存スルニ見テモ歷然タリトテ全島我所屬ナルコトヲ主張シ尙下田條約ノ規定ニ言及セルニ「ムラビヨフ」ハ、「ブチャチン」ハ擇提島ノ國境ヲ定ムルノミニテ「カラフト」ニ付テ交渉スルノ權限ナク同地ハ自分ノ管轄ニ屬スルモノナレハ今回ハ豫テ日本側ノ希望ニ基キ境界ヲ確定スヘキ處、露國ノ條件ハ

(一)「ザハリン」ト蝦夷トノ間ノ海ヲ以テ境トシ、(二)「サムリン」「アニア」ニ於ケル日本漁業者ハ何時迄モ差置キ差支ナク、(三)日本人ノ「アムウル」滿洲境邊ヘノ往來居住ハ自由ナリノ三ヶ條ナリト提議シ、且ツ同地ノ「アイノ」ハ日本臣民ニ非サル旨附言セリ。依テ我方ハ海ヲ以テ境トスルコトハ出來サルモ政府ニ報告シテ何分ノ回答ヲナスヘシト述ヘ其日ノ對談ヲ終レリ。

八月二日幕府ハ村垣堀等ノ意見ヲ徵シ且ツ外國奉行評定所ニ於テ審議セシメ其結果應接係ニ訓令スル所アリ。依テ對談ニ於テ幕府全權ハ下田條約ニ樺太ハ界ヲ分タスト規定シアル次第ナルヲ以テ本蝦夷地ト北蝦夷地トノ間ヲ以テ境トナスコトハ斷シテ認メ得ス、強テ境界ヲ立ツレハ北緯五十度東ハ「タライカ」西ハ「ホロコタン」トシ即樺太ヲ半分ニスルコトニ取極ムヘシト述ヘタルニ、「ムラビヨフ」ハ種々詭辯ヲ弄シタル後強硬ナル態度ヲ以テ提案三ヶ條ノ諾否ヲ求ムルト共ニ樺太ノ警衛ハ如何ニスルヤト反問シ、我方カ人數ヲ送り萬全ヲ期スヘシト答フルヤ、然ラハ露國側ハ樺太全島ヲ露領ト心得界ヲ立タス其儘ニナシ置クヘク、譬ヘハ千島ニ於テハ露人ハ得撫島ヨリ勝手ニ南ヘ入ルコト出來サルモ「ザハリン」ニ於テ露國軍隊カ南ヘ行クコトモ南ノ人カ北ヘ行ク事モ出來ル次第ナリト申述ヘ更ニ會談致度旨ヲ申出タルカ、我全權ハ決然トシテ半島トスルニ同意ナキニ於テハ條約通り据置クヘク更ニ會談ノ必要ナキ旨ヲ答ヘ、遂ニ交渉不調ニ終レリ。

「ムラビヨフ」伯ハ神奈川ニ於ケル露國將兵殺害事件ノ交渉ヲ「ウニコフスキイ」大佐ニ委任シ置キ露曆八月二十六日日本國ニ向ケ横濱ヲ出帆セリ。

二、神奈川ニ於ケル露國將兵殺害事件

七月二十七日(露曆八月十四日)神奈川ニ於テ買物ニ赴キタル露國艦隊乗組ノ海軍少尉「ムフエト」及

其從兵ノ殺害事件發生シ右ハ水戸浪士ノ所爲ト推定セラレタル處、事件發生直後各國領事ハ運上所ニ
集會シ事件ノ調査ヲナシ、外交團ハ將來ニ於ケル外國人ノ生命保護ヲ問題トシ英國公使「オールコッ
ク」率先シテ閣老ニ迫リタリ。「ムラビヨフ」伯ハ八月二日談判ノ際本件ニ言及幕府全權ニ對シ、本件
ハ境界問題ヨリモ大切ナル處同所ノ奉行カ犯人ノ穿鑿ヲ一向僥略ニナシ置ク由ナルカ右ハ甚タ不快ナ
ルノミナラス奉行ニ於テ召捕ノ手筈ナキヤニテ又政府ヨリ命セラレタルモ抄取ラサルニ於テハ自分ニ
テ手立スヘキカト考ヘ居ル次第ナリト述ヘタルヲ以テ、幕府全權ハ事件ニ對シ遺憾ノ意ヲ表シ政府ハ
充分犯人ヲ穿鑿中ナル旨ヲ辯解シタリ。

幕府ハ本件ニ關シ濱口讚岐守、酒井隱岐守及堀織部正ヲシテ「ムラビヨフ」ヨリ委任ヲ受ケタル「ウン
コフスキイト」ノ交渉ニ當ラシメ、交渉四回ニシテ九月朔日我方ヨリ露國側要求ノ

(一) 高貴ノ人「アスコリド」號ニ至リ本件發生ニ付謝辭申入ルヘシ

(二) 事件發生地ノ奉行ハ免職スヘシ

(三) 犯人ハ八月二十八日迄ニ逮捕シ露國將校及水兵ノ目前ニ於テ死刑ニ處スヘシ

ニ對シ右

第一條ハ要求ニ隨テ速ニ取行フヘシ

第二條ノ當時横濱ニ勤務セル奉行水野筑後守及加藤隱岐守ハ既ニ八月二十八日免職セリ

第三條ハ日本當局ニ於テ有ユル手段ヲ講シタルモ右期間中ニ逮捕シ得ナリシヲ以テ「アスコリド」號
出帆後右犯人ヲ捕ヘ得ハ在箱館露國領事カ指定スル場所ニ於テ、欲スルナラハ其目前ニ於テ死刑
ニ處スヘシ

ト回答セリ。尙幕府ハ先方ノ要求セル如ク其費用ヲ以テ被害者ノ葬儀ヲ營ミ其墓ヲ横濱ニ建テ葬儀ニ
ハ奉行參列スルコトヲ約シタルヲ以テ茲ニ本件ハ解決ヲ見、神奈川奉行水野筑後守ハ軍艦奉行ニ轉任
シ、被害露國軍人ハ増徳院ニ葬リ葬式ニハ新神奈川奉行竹本圖書頭本式ノ供揃ニテ參列シ、幕ハ其後
英國領事「ホワルトワイズ」ニ於テ斡旋建立セリ。

第三項 竹内下野守等ノ露都交渉

一、交渉開始ニ至ル迄ノ経緯

江戸ニ於ケル樺太境界確定問題ニ關スル「ムラビヨフ」伯ト遠藤但馬守及酒井右京亮トノ交渉ハ露國側
カ宗谷海峡ヲ以テ兩國ノ境トセントシ我方ハ北緯五十度ヲ主張セル結果妥結ニ至ラス。依テ我方ハ樺
太ニ關シテハ下田條約ノ規定ヲ存積セシメ、露人カ五十度以南ニ移住シ來ルトモ苦カラス同地ハ依然
雜居ノ地トナシ同地ノ警備ヲ増強シテ我所領タルノ實ヲ示スコトセリ。

然ル處文久元年(一八六一年)三月赴任前箱館奉行村垣淡路守ハ、本官カ前年米國ヨリノ歸途「バタビ
ヤ」ニ寄港セル際「アムウル」ニ回航スヘキ多數ノ大砲ヲ積載セル露國軍艦ノ修理中ナルヲ目撃シタル
カ右ハ何レ樺太ニ仕向ケラルヘク、樺太ニ於テ我方ハ移住及警備ノ者増加セルモ與地ニ入ラサルニ對
シ露人ハ益々南下ノ勢ニテ砲臺ヲモ建築スルコトアルモ之ヲ差止ムル辭柄モ無ケレハ自然和親ノ破ト
ナル形勢ニ在リ、而シテ先般「ゴシケグヰチ」領事出府ノ節本官ニ對シ英國カ對島ヲ奪フ計畫アリト忠
告シタル上前年露國ハ支那ト條約ヲ締結シ國境ヲ定メタレハ日本トモ右様取極メ互ニ外寇ヲ防カハ英
佛等モ容易ニ覬覦セサルヘキ旨申居リタル次第アリ、右ハ好機會ナレハ同領事ト交渉シテ五十度ヲ以
テ國境ト定メ得ハ同島南部ニ在ル露國ノ移住者ハ勿論砲臺等ノ地モ貸地ノ名目トナル故不都合モ無カ



ルヘク、若シ同領事ニ於テ交渉ニ應シ難キ場合ニハ本國政府ト交渉スルカ又ハ江戸ニ於テ交渉スルカ
 兎ニ角氣永ニ機ヲ俟テ談判ヲ試ミ度旨稟請スル所アリタリ。依テ幕府ハ外國奉行、外國掛目付、勘定
 奉行等ノ意見ヲ徵シタル上、六月頃五十度「ホロコタン」邊ヲ目當トシテ自然ノ要害ノ地ヲ見計ヒ分界
 スル心得ヲ以テ成否ニ不拘廉立テス談判ヲ爲スヘキ旨決定シタリ。
 然ルニ樺太ニ於テハ同年二月露國側長官「マロカソフ」ヨリ總督ノ命ニ依ル趣ヲ以テ東海岸「イヌシ
 ナイ」ニ移住地準備ノ爲差越取調ヲナシ度旨申出アリ、且ツ四月頃「ニコラエフスタ」ヨリ多人數渡
 航ノ風聞アリトテ同地支配組頭井上元七郎ヨリ、右様密人ノ移住増加シ武備モ整フトキハ同地ニ於テ
 ハ主客顛倒ノ狀勢トナルヘキニ付國境ヲ「ホロコタン」「タライカ」線ニシテ不可ナレハ久春内、真縫
 ノ線迄讓歩スルトモ兎ニ角速ニ之ヲ定ムル様英斷アリ度旨申シ來レル趣ヲ四月箱館奉行ヨリ報告ノ
 次第モアリタリ。
 斯クシテ我方ニ於テハ國境確定交渉ノ機會ヲ待チ居リシ處、八月二十日箱館奉行及目付山口勘兵衛ハ
 奉行所へ來レル露國領事及露艦「アメリカ」艦長ニ對シ、過般航路測量ノ爲「ニコラエフスタ」へ出張セ
 ル調役水野正太夫カ「カザグヱチ」知事ニ面會ノ際同知事ハ樺太境界ヲ確定シ度旨申居リタル由ナル
 カ艦長ニ於テハ右ニ付承知スルヤト質問シタルニ、同艦長ハ露國ハ以前ヨリ之ヲ希望シ居レルコト勿
 論ナリト答ヘタル次第アル趣ヲ以テ、村垣及山口ハ右報告ト共ニ今般派遣ニ決定セル竹内下野守等ノ
 使節ヲシテ露國政府ニ對シ五十度ヲ目標ニ「ホロコタン」「タライカ」ノ線ヲ以テ國境トスル様交渉セ
 シメラレ度旨建言セリ。
 幕府ハ右建言ヲ容レ、箱館奉行ヲシテ露國領事ニ一應交渉セシメ且ツ竹内下野守等ノ露都交渉開始方

ニ付本國政府へ申進スル様申入方訓令セリ。依テ八月二十七日村垣、山口及支配向ノ者一同露國領事
 館ヲ訪ヒ此度政府ヨリ差關アリタリトテ北蝦夷地境界取極方交渉シ度旨申入レタルニ領事ハ其權限ナ
 シトテ之ニ應セザリシ爲、九月箱館奉行ハ書面ヲ以テ樺太ノ境界定マラス雜居ノ弊害アル點ヲ指摘シ、
 五十度ヲ以テ境界トスヘキ理由ヲ詳細ニ述ヘ速ニ分界ノ交渉ヲ開始スル様本國政府ニ奏達セラレ度旨
 申入レ領事之ヲ受理セリ。
 二、露都交渉ノ經過
 幕府ハ竹内下野守、松平石見守及京極能登守ノ遣歐使節ニ對シ文久元年十月十三日附ヲ以テ、露國ニ
 赴キタル節北蝦夷地ノ國境ニ付露國政府ト篤ト談判シ五十度ヲ以テ國境ト取極ムル様訓令シ、尙使節
 ヨリノ伺出ニ對シ十二月二十日附ヲ以テ、五十度以南ノ露人ハ引拂ハシムル様ニ努メ若シ右交渉成立
 セサレハ貸地トイフ建前ニテ些少ナリトモ地代ヲ拂ハセ期限ハ一ケ年トカ何トカ短期トスヘキ旨ヲ回
 訓シ、其後五十度境界ノ談判整ヒ難キトキハ西岸ハ「ホロコタン」、東岸ハ「タライカ」シノシレトコ
 ヲ以テ境界ヲ取極ムヘキ旨ヲ追加シタリ。

我使節一行ハ文久二年七月十五日露都各宮別館ナル宿舎ニ入り八月二十四日迄滞在セルカ、着後宰相
 兼外務大臣「ゴルチャコフ」ニ對シ樺太境界確定問題ニ付交渉開始方申入レタル處、先方ハ本問題ニ付テ
 ハ往年「ブチャチン」ヲシテ交渉セシメタルモ要領ヲ得ス、其後「ムラビヨフ」ヲ全權トシテ日本ニ派遣
 シタル時ニモ日本ハ其主張ヲ固持シテ更ニ境界ヲ定ムルコトヲ肯セザリシニ依リ今此申出ニ應スルコ
 トハ好マスト雖モ折角ノ使節故枉テ談判セシムヘントテ、曩ニ支那公使トシテ「ウスライ」地方ヲ獲得
 セル亞細亞局長「イグナチエフ」伯ヲ全權ニ命シ交渉ニ當ラシメタリ。

日露兩國全權ハ七月二十六日、二十七日、八月二日、五日、九日及十五日ノ六回ニ亙リ使節宿舎ニ於テ談判シタルカ、最初ノ會議ニ於テ我使節ヨリ北蝦夷地境界ハ「カラフト」ノ内北緯五十度ノ所ニ取極メ度旨ヲ申入レタルニ、「イグナチエフ」ハ何故日本ハ「ムラビヨフ」ノ申入ニ應セザリシヤヲ問ヒタルヲ以テ、我方ハ同島ノ内「アイノ」ノ住居スル地タケハ我國附屬ノ地ナルヲ以テ右様主張セル爲交渉ノ纏ラサリト述ヘタリ。先方ハ境界取極ニハ實地事情ヲ明確ニスル必要アリトテ同島ノ地名其他ノ地方事情ニ通スル智識ヲ誇示スルト共ニ、同島ハ露國人ノ最早ク發見測量セルモノナリ、舊記ニ依レハ同島ハ元支那ノ領土ナリ、「アイノ」ハ千島人種ニシテ日本ハ從來之ヲ撫育セザリシヲ以テ露國ニ於テ先年陣屋ヲ取建テ撫育スル豫定ナリシ處氣候惡ク惡疫流行ノ爲一時取拂ヒタル次第ナリ等我方ト「プチャチン」トノ交渉ノ結果トシテ陣屋等ヲ取拂ヒタルコトヲ否認シ、次テ我方ノ境界五十度説ノ根據ニ付質問シタリ。之ニ對シ我使節ハ「アイノ」カ漁獵ニ赴ク最北端ハ「ホロコタン」ニテ略々五十度邊ナレハ大體之ヲ以テ境界トシ双方役人實地見分ノ上取極ムヘント答ヘ第一回ノ交渉ヲ終レリ。

次テ二十七日ノ會議ニ於テ我使節ヨリ本問題ニ關スル露國政府ノ意嚮ヲ問ヒタルニ「イグナチエフ」將軍ハ、凡ソ國境ニハ標杭等ヲ建ツルモ往々不明ノコトアリ牛一頭越境スルモ紛争ノ種トナルコトアリ、天然ノ界タル海ヲ以テ境界ヲ定ムレハ斯ル紛争ノ基ヲ無クシ得ヘキモ露國政府ハ日本ニ對シ隔心無キヲ以テ界ヲ定メサル方却テ平和ヲ破ラサルヘシ、露國ハ支那ト陸境ヲ以テ接スルモ天然ノ地形ヲ以テ境界ヲ定メアルヲ以テ平和ナリト言ヘルヲ以テ我使節ハ、戰爭ハ接壤ノ如何ニ依ルモノニ非ス普爾戰爭ノ例ニ見ルモ懇親ノ破レヨリ發生スルモノアリ、然ルニ樺太ノ如ク雜居ニテハ偶然ノコトヨリ如何ナル事變起ラストモ限ラサルヲ以テ境界ヲ定ムル必要アリト反駁セリ。次テ露國側ハ日本使節ハ樺太

五十度以南ハ往古ヨリ所領ナリト謂フモ同地ニハ役人無シト云ヘルヲ以テ、我方ハ先年「フグオストフ」等ハ樺太ニ於テ我會所ヲ寇掠シ其爲罰セラレシニ非サト説破スルト共ニ、復々陣營問題ヲ論議シ日本役人詰合ノ實況ヲ説明シタリ。

八月二日ノ會議ニ於テ我使節ヨリ「カラフト」五十度以南ハ我所屬ニ相違ナシトノ旨了解サレシヤト問ヒタルニ「イグナチエフ」ハ、其趣旨タケハ了解シタルモ露國政府ノ趣旨ニハ反シ居レリ、此間中ヨリ日本全權ノ主張セラレタル舊記ニ付テハ最早言フ必要モナキモ抑々露國政府ハ使節折角出向ノコトナレハ其任務ヲ可成行届ク様取計ハントシテ交渉ニ應ジタル次第ナリ、「カラフト」ハ往古ヨリ支那ノ屬島ニテ日本人ハ漁業等ノ爲折々往來スルノミナリ、日本政府ニ於テハ從前之ヲ屬領ト心付ナク別段手入モセス近來ニ至テ大切ノ地ト氣付キ漸ク手入ヲセルモノト思考ス、然シ露國ハ接壤ノ地ニ境界ヲ確定セサルニ於テハ紛議ヲ生スル惧アルニ付境界ヲ天然ノ地勢ニ依リ確定セント主張スル次第ナリト述ヘタリ。

依テ我使節ハ「カラフト」カ往古ヨリ我所領ニシテ永ク統治セル事實アリ、會所ヲ設ケ役人モ勤務シ居リ且ツ外國出版ノ地圖ノ色分モ舊記ト自然ニ符合スト説明シタル處、「イグナチエフ」ハ地圖ヤ地圖ノ色分ハ當ニハナラスト云ヘルヲ以テ我使節ハ、航海者ハ地圖ヲ當ニシ居リ現ニ下田ニテ見タル露國軍艦所持ノ繪圖ニモ又先日見物セル露都天文臺ノ地球圖ニモ「カラフト」ノ半分ハ我所領トナリ居リ、且ツ露國製ノモノカ誤ナリト云ハルルモ外國製ノモノマテ一樣ナルハ不思議ニテ之カ支那ノ屬島ナトトハ更ニ了解シ難キ所ナリト説破シ我方主張ヲ反覆説明シタリ。右ニ付「イグナチエフ」ハ繪圖ノ色分ハ初メ航海者カ其地ニ到リ遭遇セル者ニ何處ノ人カト尋ネタル處曩ニ日本ヨリ渡來ノ者カ日本人ト答ヘ

タレハ其地モ矢張り日本人ノモノト思ヒ色分シタルモノニテ色分ハ決シテ證據トナラストテ詭辯ヲ弄シ、久春内四十八度以北ニハ蝦夷人ヲ見受ケタルモノ絶對ニ無ク日本カ五十度説ヲ出シタルハ「ムラビヨフ」ノ時以來ノコトナリ、「ブチヤン」ハ國境ヲ定ムル權能ナキヲ以テ「カラフト」ハ界ヲ分タスト條約ニ記載セル次第ナリ、又使節ハ日本ノ人心不折合ニテ露國カ權太ヲ奪食スルモノトシ異變ヲ起スヤノ惧アル爲境界確立ヲ要スト主張スル處海ヲ以テ境トセハ渡航スルモノモナキヲ以テ之ヲ防止シ得ヘシ、又露國側カ炭坑ヲ發見セルハ余程以前ニシテ國用ノタメ採掘シ居レルカ日本ハ石炭ヲ何用ニ供シ居ルヤ又土人ハ日本ニ懷キ居ラスト述ヘ、右様ノコトヲ反覆論議スルニ於テハ枝葉ニ亙リ際限モナキニ依リ談判セルコトヲ書面ニシ度ト申出タリ。

然ルニ我使節カ五十度以南ニテハ境界ヲ取極メ難キ旨ヲ述フルヤ、「イグナチエフ」ハ久春内ニハ露國陣營モアリ此ヨリ以北ニハ日本人ノ居住スルモノナキヲ以テ五十度ニテハ交渉難ク、今此所ニ於テ現地ノ事情ヲ知ラサル者カ論議スルモ黑白ヲ定メ難キニ付テハ彼地附近等ヲ支配スル者ヲ双方全權トシ實地見分ノ上箱館又ハ「ニコラエフスタ」ニ於テ交渉スル外ナシト提議シタリ。我使節ハ實地見分ノ上決定スルトセハ五十度内外トモ實地ノ模様ニ依ルモノナリヤト念ヲ押シタル處、「イグナチエフ」ハ右提議モ日露兩國ノ和親ト使節ノ立場ヲ顧慮シタル厚意ニ出テタルモノニシテ露國政府カ敢テ希望セル次第ニハ非サルモ自分一己ノ考ニ依レハ實地ノ模様ニ依ルトシテモ四十八度ノ所ニ陣營アレハ其以北ニ境界ヲ定ムルコトハ出來サルヘシト述ヘ、我方カ鶴城邊迄日本人居住シ居ルニ付四十八度ノ境界トスルハ不合理ナリト説キタルモ先方ハ之ニ應セス、右實地見分ノ上交渉スルコト、委員ヲ任命スルコト等ニ關シ文書ヲ作成スルコトニ話ヲ進メ第三回ノ交渉ヲ終レリ。

八月五日ノ會議ニ於テ「イグナチエフ」ハ佛國出版ノ地圖ナリト樺太全島ヲ露領同一ノ青色ニセルモノヲ示シ地圖ノ當ニナラサル證據トシ、且ツ久春古丹ニ五年間（一八五三—一八五七年）居住セル「ロダノスキイ」ナル者ヲ列席セシメ舊記ヨリモ生證據トシテ「アニワ」以北ニハ土人ノミニテ日本人居住セザルコトヲ證言セシメタル後、近來日本カ彼地ヘ役人ヲ派遣シ夫々世話セシムルニ至レルハ一體日本政府自身ノ發意ニ因ルモノナリヤ又ハ外國ヨリ何トカ申立テタル結果ナリヤト質問セリ。依テ我使節ハ先年來朝ノ「ムラビヨフ」カ半島トシテ境界ヲ定ムルモ日本ニテハ警衛十分ニ行届カサルヘタ其結果他國ヨリ覬覦ヲ招キ兩國國交ニ影響スヘキヲ以テ露國ニ於テ防備セントノ言ヲ爲シタルヲ以テ、我政府ニ於テハ之ヲ甚タ不快ニ思ヒ旁々警備ノ實效ヲ期スル爲松前伊豆守ヨリ樺太ヲ上地セシメ幕府ノ直轄トシ警衛ノ充實ヲ圖レル次第ナリト説明シタルニ、「イグナチエフ」ハ露國カ海ヲ以テ境トスルモ畢竟軍艦ヲ同島ニ置キ外國軍艦等ノ來ラサル様ニセントノ意圖ニ出ツルモノナリトテ自方ノ主張ヲ補足シ、再ヒ四十八度以北ニ日本人ノ居住セザルコトニ付論議ヲ繰返シタル後現地ノ事件ニ言及シ、昨日「ムラビヨフ」ノ後任「コルサコフ」總督ヨリ皇帝ニ宛テタル書翰ニ依レハ彼地ニ於テハ日本人來リテ土人ニ全島日本所屬ナリト言觸レサセ露人トノ交際ヲ禁シ、又露國側カ石炭採掘ノ爲土人ヲ雇入ルルヲ禁シ犯スモノハ處罰スヘシト嚇シツツアル由ニテ右ハ條約違反ナリ、右ニ關スル交渉圓滿ニ解決セザレハ軍艦ヲ派シテ談判セザルヘカラサル旨申來リ、皇帝ニ於テモ嚴重交渉スヘキ旨下命セラレタレハ自分ヨリモ貴使ニ交渉ニ及フ次第ナリト申出タリ。

越テ八月九日ニハ交渉取極書ノ文案ニ付協議シ「境界五十度」ノ文句ヲ除クコトナリ、十五日最後ノ會議ニ於テ我使節ヨリ「サガレン」島ノ境」トイフ文句ヲ「サガレン」島ニアル境」ト訂正スル様申

九〇
入レタルニ、「イグナチエフ」ハ憤然トシテ其必要ナシト云ヘルモ結局承引シテ交渉ヲ終リ、同日外務省ニ於テ我三使ト宰相兼外務大臣「ゴルチャコフ」トノ間ニ開港開市五ヶ年延期ノ件及貨幣改鑄ノ件ト共ニ左記要旨ノ「箇條書」ニ調印ヲ了セリ。

箇條書

日本大君殿下ノ使節其政府ヨリ魯西亞政府ト談判可及旨ヲ命セラレタル趣ヲ同政府ノ外國事務「ミニストル」ヘ陳述シタリ

第一(省略)

第二「カラフト」「サガレン」島境界ヲ定ムヘシ

第三(省略)

右三ヶ條双方綿密ニ商量談判シテ左ノ通り決定セリ

第一(省略)

第二「カラフト」「サガレン」島境界取極ノ事

魯西亞政府ニ於テ此島ニアル境界ヲ定メントノ談シテ承引セス然レトモ日本政府ヨリ其境ヲ取極メント切ニ求ムルニ由テ魯西亞政府ハ其島近傍ノ總督皇帝殿下ノ「スツード」隨臣ノ義ノ「コントル」アドミラル「海岸諸州」軍務奉行「シベリ」海軍隊及太平洋諸港ノ指揮官兼「サガレン」ヲ支配セル「ヘール」カザケウイチニ要用ノ全權ヲ與フヘキ旨ヲ約セリ。「コントル」アドミラル、カザケウイチハ時宜次第箱館在留「コンシユル」ノ取次ニテ日本政府ヨリ委任ノ人ト右ノ事ニ付面談スヘシ

第三(省略)

三、交渉後ノ成行

竹内下野守等ノ使節ハ文久二年(一八六二年)十二月十日品川ニ歸着シ幕府總裁松平春嶽ニ復命シタルモ、同侯ハ國內ノ狀況困難ニシテ此際直ニ樺太境界問題ヲ顧ル遑ナキ趣ヲ述ヘ本問題ハ其儘トナリ居リタル處、翌文久三年七月二日(一八六三年八月三日)露國領事「ゴシケヴィチ」ハ箱館奉行ヲ經テ我外務長官宛書翰ヲ送り、今般露帝ハ日露國境確定ニ付日本全權ト交渉ノ爲沿海州知事「カザケウイチ」ニ全權ヲ與ヘタリ、樺太全島カ露國ニ屬スルハ利益ニシテ此事ハ曩ニ東部西伯利總督「ムラビヨフ」アムウルスキイ「伯」ヲ全權ニ任シタル時以來再三日本政府ヘ告知セル所ナリ、惟フニ日本人ノ樺太ニ居住スルニ至リタルハ久シカラス官吏ノ巡見ニ出張セルハ八年前ニテ其節其島ヲ初メテ知レリ、然ルニ隣國ノ平和ヲ永久ナラシメンニハ天然ニ定マレル境界ヲ定ムヘキ因テ「カザケヴィチ」ニ全權ヲ與ヘラレシナリ、且ツ交渉ノ全權ハ事毎ニ政府ニ請訓スルコトナク「ラベルウズ」(宗谷)海峡ニ於ケル經界議定ニ關シテハ全權限リニテ取扱ヒ取極ムルコト可然ト思考ス、日本全權ノ「ニコラエフスク」渡航ニハ便宜當館ノ爲在泊中ノ軍艦ヲ提供シ領事モ同行スヘキ旨申出テタリ。

右申出ニ關シ外國奉行ハ命ニ依リ評議シ委員ヲ派シテ境界ヲ確定セシムヘキ旨決定シタルモ、幕府ハ當時大改革中ニテ國內各地ニ兵亂サヘ起レル際ナリシヲ以テ何等回答セス全權ノ任命モナサリシ爲後ニ至リ「カザケヴィチ」ヨリ、交渉開始提議以來數ヶ月ヲ經タルモ未タ日本政府ヨリ全權委員派遣ノ通牒ニ接セサル處右ハ日本政府ニ於テ實地見分ノ上境界ヲ定ムルノ約定ヲ放棄セルモノト認ムル旨ヲ幕府ニ通告シ來レリ。

斯クシテ竹内下野守ノ露都交渉ハ何等ノ成果ヲ見ス境界問題ハ依然トシテ未解決ノ儘ニ殘サレタリ。

第四項 小出大和守ノ「カラフト」島規則書約定

一、使節派遣ニ至ル迄ノ経緯
 竹内下野守等ノ露都交渉ノ結果モ我方カ國內事情ノ爲委員ヲ派遣セザリシヲ以テ何等ノ成果ナク、樺太境界ハ從來通りニテ定マラス樺太ハ日露兩國人雜居ノコトナリ居レルカ、現地ノ事態ハ益々容易ナラサルモノアルニ至リ、元治元年(一八六四年)九月、翌慶應元年七月、八月、九月箱館奉行小出大和守ハ出先官憲ノ報告ニ基キ、樺太ニ於テ露人ハ久春内以南ニ來リ、開墾ヲ初メ漁業ノ爲同所及真縫川以北ニ邦人ハ入ルヲ得ス等暴言シ、又露國軍艦ハ移民及大砲ヲ輸送シ來リ陸揚シ英國ノ攻撃ニ備フルモノナリト稱シ砲臺ヲ築キ又米人ト通商シ居リテ久春古丹ヲ開港場トスルヤモ圖リ難シ等ノ狀況ヲ報告シ、之カ對策トシテハ我方ノ開拓警備ヲ擴充スルハ勿論ナルモ國境ヲ確定スルヲ緊要トスヘク、境界ノ場所ニ付テモ五十度ハ到底露國政府ニ於テ承引セサルヘキヲ以テ四十八度邊迄讓歩スルモ可ナルヘシト建言シタツ。外國奉行ハ右稟議ニ付大體小出ノ意見ヲ容レ交渉開始方可能旨ヲ評決シ、慶應元年十月ニハ境界ノ場所ニ關シ五十度ハ露國側ニ於テ到底承諾セサルヘキヲ以テ四十九度ノ「ボロケシ」ヲ以テ一應談判シ夫ニテ纏マラサレハ久春内、真縫川ノ川筋四十八度トシテ交渉セシムヘシト答申セリ。先之九月老中水野和泉守ヨリ露國外務大臣宛ニテ文久三年七月ノ露國領事ノ書翰(前項三)ヲ引用シ、我方ハ國內兵亂ノ爲委員派遣ヲ延引シタルカ本件ハ捨テ置ク譯ニアラサレハ全權委員ノ者ヲ彼地ニ差出スヘキニ付露國政府ヨリモ全權ヲ差遣セラレ度、右露國領事ノ書翰中ニ樺太全島ハ露國所屬トアルモ同島ノ我露所領ナルコトハ證據アリテ歴然タリ、然レトモ今ハ最早度數ヲ論スヘキ筋ニハアラス兩國親善ノ關係ヲ以テ島上山河ノ形勢親見ノ上可然場所ニテ分界致度、右回答アリ次第當方全權委任ノ者

ヲ派遣スヘキ旨申入レタリ。

右ニ對スル露國政府ノ回答未タ無カリシ處、翌年二月二十三日久春内詰合役人十名カ犬橋ニテ同地北方「シラオロ」(巡視ノ爲赴キタル際同地「ミンチク」中尉指揮下ノ露兵ニ毆打セラレタル上逮捕監禁セラレタル事件起リ、我方役人カ三月箱館ニ於テ交渉セル結果四月十五日附ヲ以テ「ビュツ」領事ヨリ右釋放ノ旨回答アリタルモ、久春内以南ニ露人家屋建築差控方ニ付四月箱館奉行小出大和守及目付織田市藏ヨリ「ビュツ」ニ交渉セルニ先方ヨリ、日本側ハ境界確定ノ爲實地見分ノ委員派遣ヲ爲サスシテ其上久春内以北ニ迄進ミ家屋建築ヲナシ居ルモ露國側ハ之ヲ差止メサルニ、露國側ノ南部ニ於ケル家屋建築ノミヲ差控ユルコトハ不合理ナルヲ以テ右承引シ難キ旨回答アリタリ。

斯カル間ニ四月小出大和守及織田市藏ハ訓令ニ依リ後任者ニ事務引繼ノ上例年ノ蝦夷地巡視ノ積ヲ以テ「ニコラエフスク」ニ赴キ同地ノ奉行ト交渉セントシ、小出ヨリ「ビュツ」領事ニ申入ラナシタル處、同領事ハ「カザケヅ」ハ轉任シテ既ニ「ニコラエフスク」ヲ去リ後任者ハ境界交渉ニ關スル委任ヲ受ケ居ラサルニ付同地ニ於テ交渉スルコト出來サルヘク、欲スレハ露都ニ赴キテ之ヲ議スル外ナカルヘキ旨ヲ述ヘタリ。

於茲小出等ハ樺太出張ヲ見合セ、六月歸府シ累ネテ境界決定ノ必要ニ付建言スル所アリ。之ニ對シ六月外國奉行ハ評議ノ上、露國南侵ノ勢ヲ禦クニハ露都交渉ノ覺書ノ通り交渉ヲ進ムル様廟議決定アリタク、境界ノ位置ニ付テハ久春内ヲ以テセハ緯度數モ減退シ山川ノ形勢上自ラ分界ノ姿モ立ツヘク、尙之ニテ交渉纏マラサルトキハ小出、織田等ハ將來ノ憂患トナルヲ以テ不可トセルモ各國ノ公案ニ從フコトトシ、且ツ小出カ建議セル得撫島ヨリ溫禰古丹島迄ノ千島ト樺太トノ交換ハ大小ノ差異アリ他國ノ

貶議モ如何カト思ハルルノミナラス地勢上有用ノ地ヲ無用ノ地ニ換ユルコトトナルヘク、露國カ全島ヲ所有シテ久春古丹ヲ開港トスル如キコトアラハ其南侵不可禦ノ勢トナルヲ以テ不可ナル旨ヲ答申セリ。

九四

右ノ經緯アリタル後慶應二年八月幕議ハ遂ニ使節ヲ露都ニ派遣スルコトニ決シ、八月十九日附ヲ以テ箱館奉行小出大和守及目付石川駿河守ヲ使節ニ任命シ、尙箱館奉行杉浦兵庫頭ヲシテ同地露國領事「ビュツォフ」ニ對シ小出大和守露都派遣ニ關スル周旋依頼狀ヲ本國政府ニ發送スル様申入レシメタリ。

二、交渉ノ經過

我全權小出大和守及石川駿河守ハ露國外務省亞細亞局長「ストレモウホフ」ト慶應三年（一八六七年）正月二日、五日、八日、十一日、十八日、二十一日、二十四日及二月七日ノ八回交渉シ其結果二月二十五日（三月十八日）「カラフト」島規則書ナルモノニ調印セルカ、右應接書ニ依ル交渉ノ經過次ノ如シ。

會議ノ劈頭「ストレモウホフ」ハ久春内事件ノ解決ハ全ク懇親ノ處置ナリト言ヘルニ依リ、我使節ハ右ニ關シテハ後會ニ於テ申入ルヘキモ、抑々樺太ノ所屬ニ付テハ我邦ニ確タル舊章典故アリテ此點ニ付テハ前使節ヨリモ詳細説明スル所アリ、若シ全島露國ノ所屬ナリトセハ島上實地ニ於テ談判議定スヘシトノ盟約ハセサリシ筈ナリト云ヘル處、先方ハ右所屬問題ニ關スル是迄ノ交渉ノ次第ヲ陳述シタル上、「ブチヤチン」談判ノ節ハ日本人ハ樺太ニ漁獵ノ爲渡航スルノミニテ同地ハ日本ノ所屬ニアラサリシヲ以テ其趣旨ニテ談判シタル處、日本ハ色分地圖ヲ以テ五十度ノ所ニテ境界ヲ取極メ度ト主張シタルカ右ハ露國ノ主張ト合致セサルヲ以テ物分レトナリ、「ムラビヨフ」ハ「アニツ」(宗谷)海峽ヲ

以テ境トシタク尤モ日本人カ漁業ノ爲樺太ニ渡航スルハ差支ナキ旨ヲ申入レタルモ日本側カ承引セサリシヲ以テ下田條約ノ通り露國人ハ何處ニ移住スルモ苦カラストシテ歸國セリ、然ルニ一八六二年ノ取極アルニ不拘日本側ヨリハ全權ヲ差遣セス今日ニ至ル迄何等ノ通告モナキハ違約ナレハ樺太全島ハ露國ニ附與セラレタルモノナリト存居レリ、若シ歐洲ニ於テ右様違約ノコトアルトキハ其儘ニハ捨置キ難キモ露國ハ日本ニ對シテハ格別ノ好誼ヲ以テ交渉シ居ルモノナリ、日本カ國內多難ニシテ右手續ヲ怠リ居レリトノ御説明ナルモ露國トテ國事多端ナレトモ外國關係殊ニ境界等ノ問題ハ大切ナルニ付全權ヲ差出シタル次第ナルカ、日本ハ四年モノ長キニ亘リ全權ヲ差出サス右ニ付テハセメテ一通ノ手紙ニテモ御通知アルヘキ筈ナリ、又此度ノ使節御出向モ豫メ御通知ナクシカモ「アニツ」(宗谷)海峽ニテ境ヲ取極ムルナラハ使節カ來ルニモ及ハサリシナリト言ハルルハ不都合ナリ等述ヘタリ。

之ニ對シ小出大和守ハ昨春「ニコラエフスク」へ出張交渉方命セラレタルニ付露國領事ニ交渉シタルニ、首都ナラテハ交渉難マル見込ナキヤノ趣ニ付今回使節ヲ命セラレタル次第ナル旨説明セルモ、先方ハ猶モ厭味ヲ述ヘ且ツ樺太カ外國ヨリ攻撃セラレル場合日本ハ防禦行届クマシキ處、同島ハ「アムウル」(鎮府)ノ對岸ニ在リ露國ノ國防上重要ノ地ナルヲ以テ同地ニ防備ヲ施ス必要アルモ日本トノ約束アルニ依リ之ヲ見合セ居ル次第ナリト言ヘルヲ以テ、小出大和守ハ餘リニ輕蔑ノ申分ナリ、境界確定ノ上ハ我方ハ有事ノ時ニハ舉國一致ノ兵力ヲ以テ防禦スヘク、平時ハ番兵ヲ置キ決シテ露國ノ憂慮トナラサル様處置スヘク是却テ「アムウル」軍港ノ保障トナルヘシト説明セリ。

「ストレモウホフ」ハ猶モ其言分ヲ續ケ、右様ニ外國ニ奪掠セラレルニ於テハ容易ナラサルニ付樺太ハ海峽ヲ以テ境トナスコトトシ、漁獵ノ爲ノ日本人ノ往來居住ハ自由ニセハ差支ナカルヘク、夫ニテ不

九五

都合ナラハ得撫及其附近諸島ヲ日本ニ讓ラハ可ナラント述ヘ、我使節ハ右様不懇親ノ談判ハ致スマント不同意ヲ表シタルニ、先方ハ右ニ同意ナケレハ是迄通り據置方可然ト申立テタリ。

右ニ對シ小出大和守ハ我方カ萬國普通ノ色分地圖ニ據テ五十度ヲ以テ交渉スルハ元來厚意ノ處置ナリ、「一體」カラフト「カ日本所屬ナルコトハ古來歴然タル證據アルモ今露國ニモ有ル證據ニテ云ヘハ、文化三年北蝦夷地ニテ亂暴セル露人（「フゾストフ」等）ハ國法ヲ以テ罰セラレタル趣ナルガ右ハ露國モ同地ヲ日本所屬ト認メタルニ由ルモノナルヘク、「レザノフ」ノ隨員ノ著書ニモ「カラフト」ハ日本領ト記シタルモノアリ、長崎ニ於ケル談判ノ際「プチャチン」ヨリ差出シタル書面ニハ樺太南岸ノ地ハ日本地ナル旨明記シ居レリ、且ツ當時ノ談判ニハ何レノ場所ニテモ境界ヲ取極メ度旨申出アリ、若シ樺太全島露國所屬ト治定シタラハ從來我方カ巨額ノ經費ヲ以テ人民ヲ撫育スルコトナキ筈ニシテ今回自分カ遠路渡來セルモ最早海峽分界ノ論ハ止メ島中分界ヲ議定センカ爲ナリ、「プチャチン」ハ善隣ノ和好ヲ表シ交渉シタルモ「ムラビヨフ」ハ不懇親ノ仕向方ヲ爲セリ右ハ仁心ヲ以テ世界ニ聞エタル皇帝ノ本意ニ非スト思ハルルニ付今次談判ノ趣ハ皇帝ヘ奏聞ノ上何分ノ回答アリ度旨申入レタリ。

而シテ正月五日第二回ノ談判ニ於テ我使節ヨリ、露國カ得撫諸島ヲ讓ルニ付海峽ヲ以テ境界ヲ取極メ度ト云ヘルハ即樺太全島カ露國ノ所屬ニアラサルコトヲ了解シタルモノト認メ大慶ニ存ス、然レトモ樺太ヲ是迄通り雜居トスルニハ分界ノ爲態々全權ヲ遣サル譯モナク又久春内事件ニ付テモ日本人カ五十度迄行キタリトテ苦カラサル事ナリ、然ルニ境界ヲ定メサル間ハ右様事件ハ今後モ起リ勝ニテ結局ハ兩國ノ不和トナルヘシ、得撫諸島ヲ日本ニ讓リ海峽ヲ分界トスルコトハ外國ヘノ聞モアリ又我方國內輿論ニ鑑ミ政府ハ因却スヘク、今回自分ノ出向モ露國領事ノ返答ニ基キタルモノナレハ是非島中

ニテ分界致度トノ趣旨ヲ以テ先方ノ所言ヲ論駁シタリ。

右ニ付「ストレモツホフ」ハ海峽ヲ以テ境トスヘク島中分界シ難キコトハ「ムラビヨフ」ノ渡航及竹内下野守來都ノ節ニモ幾度カ談判シ其結果「ニコラエフスク」ニ於テ會商スルコトナリタルニ見ルモ明ナリ、「レザノフ」ノ隨員ノ著書ニハ御申立ノ如キ記事無シ、得撫諸島ヲ以テ樺太全島ニ代ヘント云ヘルモ樺太全島露領ナリト云フニ非ス同島ハ兩國所屬ナリ、外國ノ公評如何ト云フモ何モ他國ニ關係ノアル儀ニハ非ス、國內ノ輿論ニ付テハ漁業ハ從來通りトセハ何モ文句ハナカラン、若シ分界ノ曉ハ萬一他國カ同島ヲ占據スルトキ失禮ナカラ日本ハ之ヲ防止出來サルヘク露國ハ應援出來サルヲ以テ分界ハ爲ササル方双方ノ爲宜シ、「ニコラエフスク」御出張ニ付テハ其無益ナル旨及露都御出向ニ付テハ追テ境界取極可ト記載シアルノミニテ島中ニ於テ境界取極可ト儀ハ素ヨリ同意セル次第ニアラス即露國ノ希望通りニスル積ニテ御出向アルヘキ旨領事ヲシテ通知セシメアル筈ナリ等辯解セリ。於茲小出大和守ハ此上ハ領事ノ申越ノ行違ニ付爭論スルヲ止メ、樺太ニ於テハ從來自然ニ久春内ノ國境トスル様ナリ來レル處、鶴城迄ハ日本人モ行キ居ルモ同所ニテ分界シ難キニ於テハ露國陣營ノ在ル場所ニテ分界シ度ト提議シタリ。然ルニ先方ハ得撫諸島ヲ以テ樺太全島ニ代フルコトニ取極メサレハ是迄ノ仕來通りニ据置クヨリ外ナシトテ右提議ヲ拒絶シ、次テ露國ノ意圖、得撫島ト樺太トノ輕重利害等ニ付双方論難シ、其餘先方ハ憤然トシテ此談判ハ皇帝ト大君トノ交渉ナレハ不敬ハ捨置キ難シ等ノ激語ヲ吐クニ至レルカ、露國側ハ遂ニ讓歩セシテ此日ノ談判ヲ終レリ。

正月八日小出大和守病氣ニテ缺席、石川駿河守ヨリ島中分界ノ趣意ニ關シ一家中ニ二家族同居ノ例ヲ引キ詳細説明シ且ツ全島ヲ露領トスル結果ニ對スル日本輿論ノ恐ルヘキ點等ヲ述ヘ先方ノ反省ヲ促シ

タルモ、先方ハ自分勝手ノ理屈ヲ以テ應酬シ、依然トシテ露國側提議ヲ容レサルニ於テハ從來通り据置クヘク、島中分界ハ五十四度モ四十八度モ出來難シト拒絶ノ態度ヲ持シタリ。於茲我方ハ右談判ノ趣ヲ皇帝ニ再奏セラレタシト申入レタリ。次同十一日「ストレモウホフ」ヨリ、皇帝ニ再奏シ大臣ニモ報告シタルカ露國側ノ主張ハ變ヘ難キニ付歸國ノ上日本政府カ露國ノ提議通り決定セラレ其旨御通知アラハ「ニコラエフスク」奉行ニ全權ヲ命スヘキニ依リ現地ニ於テ同人ト談判セラレ度旨ヲ答ヘタリ。斯ク交渉全ク行詰リトナリタルヲ以テ、正月十八日小出大和守ハ尙一應懸談ヲ遂クルコトトシ「ストレモウホフ」ニ對シ、前使節竹内下野守ノ談判ニテハ露國側ハ初メハ樺太ハ全島露領ナリト言ヒ後ニ四十八度以北ニテハ分界シ難シト主張シタル趣ナルカ、此度ハ同島ハ日露兩國ナリ併シ島中ニ於テ分界シ難シト言ハルル處、右ハ如何ニモ日本ハ微弱故他國ノ侵奪ヲ防ク力無シト見下クル意味ニトラレ此儘復命セハ日本國內不快ニ感シ如何ナル事ノ發生スルヤモ測リ難ク、竹内下野守交渉ノ際四十八度ニハ露國陣營在ルニ依リ其以北ニテハ分界シ難シトコトナリシニ付我政府ハ右ニテ分界ヲ取極ムルコトニ決定ノ上自分ヲ派遣セル次第ナルカ、從來自然ニ境界トナリ居レル久春内ヲ以テ分界スルトキハ露國ニトリ格別ノ損無カルヘク、我方ニハ其以北ニ在ル建物取拂等ニ相當ノ損アルモ之ヲ厭ハス、久春古丹ニ在ル陣營ヲ取拂ヒ以後ハ日本ノ進退ニ一任スベシトノ趣下田條約締結ニ際シ「ボシエ」ノ差出シタル書面(右書面ヲ提示ス)ニモアレハ右條約ニ對シテモ島中ニ於テ分界シ難シトノ理由成り立タサルニ付同所ニテ分界シ接壤ノ懸親ヲ表サレ度旨申入レタリ。

九八

右ニ對シ露國全權ハ御申出ニ依リ皇帝ニ再奏セルモ皇帝ヨリノ差圖ニ依リ殘念ナカラ同意シ難ク、此上如何様ノ申出アルモ是迄申上ケタル趣意ヨリ外致方無シト述ヘ、竹内下野守トノ談判ニ於テ露國側ハ樺太全島露領ナリト云ヒタルコトナク、島中分界ノコトモ「ブチャチン」渡航ノ節ハ申入レタルモ其後ハ海峽ヲ以テ分界シタシト申入レタリ、日本ハ微弱故分界シ難シト云フ譯ニハ非サルモ只將來ノ危險ヲ考慮セル爲ナリ等我方所論ニ對シ一々辯解シ、又久春古丹陣營取拂ノ件ニ付論議シタルモ日本側提議ニ應シ難キ旨ヲ繰返シタルヲ以テ、我方ヨリ更ニ皇帝ニ報告ノ上何分ノ回答アリ度旨ヲ申入レタリ。正月二十一日露國全權ハ皇帝ニ談判ノ趣委細報告シタルニ日本側趣意ノ理否ハ何トモ云ハレサリシモ是迄申述ヘタル趣意ヲ變更シ難シトノ趣ナリト回答セルヲ以テ、小出大和守ハ斯クナリテハ他ニ致方モ無キニ依リ島中ノ規則ヲ定メタシト規則書案文ヲ提出セリ。

三、「カラフト」島規則書

小出大和守ハ其規則書案ニ於テ久春内真縫線ヲ限リ互ニ南北ニ移住セス、家屋ハ現在以上新規ニ建築セス且ツ從來本邦カ撫育セル土人ハ是迄ノ仕來通り取扱フトノ方針ヲ以テ立案シタル處、正月二十四日日本側原案ニ付双方討議シタルモ先方ハ右ハ分界ト同様ニナルヘシト同意セス、次テ二月七日露國側ヨリ對案ヲ提出シ双方商議ノ上、二月二十五日(露曆三月十八日)左記規則書ニ調印スルニ至レリ。

「カラフト」島規則書

「カラフト」島ハ魯西亞ト日本トノ所屬ナレハ島中ニアル兩國民ノ間ニ行違ノ生センコトヲ慮リ互ニ永世ノ懸親ヲ愈堅クセムカ爲日本政府ハ右島中山河ノ形勢ニ依テ境界ヲ議定センコトヲ望ム旨ヲ日本大君殿下ノ使節ハ「サンクトペテルブルグ」ニ來リテ外國事務役所ニ告知アリシト雖モ魯西亞政府ハ島上ニテ境界ヲ定ムル事ハ承諾致シ難キ趣ヲ亞細亞局「ジレクトル」名「タイニイ、ソウエツニク」名「スツレモウホフ」人ヲ以テ報告セリ其故ノ巨細ハ大君殿下ノ使節ニ陳述セリ且魯西亞政府ハ

九九

右「カラフト」島ノ事ニ付双方親睦ノ交際ヲ保タン事ヲ欲シ左ノ存意ヲ述ヘタリ

第一條

兩國ノ間ニ在ル天然ノ國界「アニワ」ト唱フル海峡ヲ以テ兩國ノ境界トナシ「カラフト」全島ヲ魯西亞ノ所領トスヘシ

第二條

右島上ニテ方今日本ヘ屬セル漁業等ハ向後トモ總テ是迄ノ通其所得トスヘシ

第三條

魯西亞所屬ノ「ウルップ」其近傍ニ在ル「チルボイ」「フラットテルボイ」「プロトン」ノ三箇ノ小島ト共ニ日本ヘ讓リ全異論ナキ日本所領トスヘシ

第四條

右ノ條々承諾難致節ハ「カラフト」島ハ是迄ノ通兩國ノ所領ト致置クヘシ

前文ノ條々互ニ協同セサルニ付「カラフト」島ハ是迄ノ通兩國ノ所領トナシ置キ且兩國人民ノ平和ヲ保タンカタメ左ノ條々ヲ假ニ議定セリ

第一條

「カラフト」島ニ於テ人民ハ陸敷誠意ニ交ルヘシ萬一爭論アルカ又ハ不和ノ事アラハ裁斷ハ其所ノ双方ノ可人トモヘ任スヘシ若シ其可人ニテ決シ難キ事件ハ双方近傍ノ奉行ニテ裁斷スヘシ

第二條

兩國ノ所領タル上ハ魯西亞人日本人トモ全島往來勝手タルヘシ且イマタ建築竝園庭ナキ所カ總テ產

業ノ爲ニ用ヒサル場所ヘハ移住建物等勝手タルヘシ

第三條

島中ノ士民ハ其身ニ屬セル正當ノ理竝附屬所持ノ品物トモ全部其モノノ自由タルヘシ又士民ハ其モノノ承諾ノ上魯西亞人日本人トモニ是ヲ雇フコトヲ得ヘシ若シ日本人又ハ魯西亞人ヨリ士民金銀或ハ品物ニテ是迄既ニ借受ケシカ又ハ現ニ借財ヲ爲スコトアラハ其モノ望ノ上前以テ定メタル期限ノ間殘業或ハ仕役ヲ以テ是ヲ償フコトヲ許スヘシ

第四條

前文魯西亞政府ニテ述タル存意ヲ日本政府ニテ若向後同意シ其段告知スル時ハ右ニ付テノ談判議定ハ互ニ近傍ノ奉行ヘ命スヘシ

第五條

右ニ掲ケタル規則ハ「カラフト」島上ノ双方長官承知ノ時ヨリ施行スヘシ但調印後六ヶ月ヨリ遲延スヘカラス且此規則中ニ舉ケサル瑣末ノ事ニ至リテハ都テ双方ノ長官是迄通取扱フヘシ

右證トシテ双方全權委任ノモノ此假ノ規則ニ姓名ヲ記シ調印セリ此ニ双方ノ譯官名稱ヲ記シタル英文ヲ副ヘタリ

日本慶應三年丁卯二月二十五日 即露曆千八百六十七年三月十八日於比特堡

小出 大和 守
石川 駿河 守

小出大和守ハ慶應三年五月歸朝シ露都交渉ノ顛末ヲ復命シタル處、幕府ハ遂ニ千島樺太交換ノ露國側

提議ヲ捨テ樺太ヲ從來通り日露兩國ノ兩屬雜居トナシ置クコトニ決シ、同年六月其旨ヲ露國領事ニ通知シ又七月二十六日各國公使ニモ通告シタリ。

而シテ十一月幕府ハ同年六月ノ箱館奉行杉浦兵庫頭ノ稟申ニ基キ樺太移住策ヲ強化スルノ方針ヲトリ、同島奥地迄手廣ニ産業開發ノ爲出稼ヲ希望スル者ハ無制限ニ許可スルコトトシ、安政二年ノ觸達同様ニ九州、四國及中國ヲ除ク各地ノ武士、百姓、町人等有志ノ者ハ箱館奉行ニ申立ツヘキ旨布告シタリ。

第二節 樺太ニ對スル我方施策及現地事件ニ關スル

交渉問題

第一項 樺太ニ對スル幕府ノ施策

下田條約締結前後ヨリ幕末ニ至ル迄ノ樺太ニ對スル我方施策大略左ノ如シ。

(一) 「レザノフ」使節來朝直後文化三、四年(一八〇六、七年)ノ「フヅオストフ」等ノ樺太寇掠ニ由リ北邊警備ノ強化ヲ必要トセル幕府ハ文化四年三月從來松前家ノ所領タリシ松前及蝦夷並ニ北蝦夷(樺太)ノ地ヲ幕府ノ直轄ニ移シ箱館奉行ヲシテ統治セシメタルカ、同年十月箱館奉行ノ代リニ置キタル松前奉行ヲシテ之ヲ統治セシメタリ。

(二) 文化五年(一八〇八年)間宮林藏及松田傳十郎ノ兩名ハ幕府ノ命ヲ受ケテ樺太ヲ探險シ、松田ハ「オツケシ」(今ノ亞港)ヲ經テ「ラツカ」岬ニ到リ、間宮ハ東岸ヲ北行シ真縫山道ニ由リ同島ヲ横斷シ、「ノテト」ニテ松田ト合シ「ラツカ」ヲ以テ國境トスル標柱ヲ建テタリ。翌年間宮ハ再ヒ樺太ニ赴キ更ニ大陸ニ渡リテ「デレン」(德榜)ニ到リ遂ニ樺太カ離島ナルコトヲ發見セリ。右ハ「ネヴェリス

コイ」ノ樺太周航ニ先立ツコト四十二年ナリ。

(三) 文化五年樺太警備ノ爲會津藩ハ四月ヨリ七月迄ノ間駐兵シ、翌年以後津輕藩兵四百五十人ハ福山、江差利尻、宗谷及樺太ニ分駐シ、樺太ニ於テハ毎年夏期増毛ニ本陣ヲ、楠溪(久春古丹)、留多加及白主ニ出張陣屋ヲ設ケタリ。本島統治ノ官廳トシテハ久春古丹及白主ニ勤番所有リ調役ヲ首班トセリ。

(四) 樺太ノ經營ハ從來請負制度ニシテ運上屋ハ一定ノ運上金ヲ納メテ漁期中「アイヌ」ヲ使役シ、鮭、鱒ノ漁業ヲ營ミ冬期ハ番人ヲ止メテ引上タルモノナルカ、此制度ハ明治初年迄繼續シ文化六年栖原、伊達兩家ノ請負トナレリ。

(五) 其後露人ノ來航一時中絶シタルヲ以テ文化四年(一八二一年)樺太ハ再ヒ松前藩領ニ復シタルカ、勤番ハ夏期久春古丹及白主ニ駐在セリ。

(六) 一八五三年「ネヴェリスコイ」カ軍艦ヲ率メテ楠溪ニ來リ兵營ヲ築クヤ松前藩ハ二隊(合計約百六十人)ノ兵ヲ久春古丹ニ送りテ之ニ備ヘタリ。

(七) 長崎ニ於ケル「ブチャチン」トノ談判ノ結果實地見分ノ爲樺太ニ派遣セラレタル堀織部正及村垣與三郎ハ安政元年(一八五四年)六月白主ニ渡リ堀ハ楠溪ニ到リ、其隨行者鈴木重尙ハ貝塚ヨリ鈴谷ヲ越ヘ内淵ニ到リ更ニ真縫山道ヲ經テ西海岸ニ出テ白主ニ歸リ、又普請役間宮鐵郎及御小人目付松山徳次郎ハ「タライカ」(多來加)迄踏査シテ地圖ヲ作レリ。

(八) 堀織部正出張復命ノ結果幕府ハ安政二年二月二十二日蝦夷地一帶ヲ上地トシテ直轄シ箱館奉行ヲシテ管轄セシメ、同年四月會津、仙臺、秋田、南部及津輕ノ五藩ニ命シテ毎年二藩宛交代シテ北邊ノ警

備ニ當ラシメ、勤番所ヲ從來ノ二個所ノ外富内(本斗)ニモ置キ後ニハ輪荒及久春内ニモ置キタリ。右勤番所ニハ調役、定役、同心、足輕、醫師等ヲ夏期勤務セシメ、又要地ニハ詰所ヲ設ケ定役、同心、足輕ヲ置キタリ。他方幕府ハ樺太ノ移住開拓ヲ圖リ譜代大名及三千石以上ノ寄合ニ對シテ布告シ移住希望ノ者ヲ選定セシメ、其他一般家人、浪人、百姓等ノ希望者ヲ移住セシムルコトトセリ。就中安政五年三月土井能登守ノ藩士十人及移民二十名ハ西海岸北部鶴城ニ、酒井鉦次郎ハ「シララオロ」、「トンナイ」、「アエロフ」ノ三ヶ所ニ家人ヲ引連レ移住シ、幕府ヨリ資金ヲ借用シテ主トシテ新漁場ヲ開設セリ。

(九) 安政三年五月松浦武四郎ハ再ヒ(初ハ一八四六年)白主ニ渡リ内淵ヲ經テ敷香附近ニ到達シ、同年江澤門四郎ハ帆溪(「ビレウキ」)ニ到リ露人ノ砲臺ヲ築キ石炭ヲ採掘スル狀況ヲ視察シ、磯村勝兵衛ハ「アラコイ」(亞港ノ北今「アルコウキ」)迄巡回セリ。

(十) 安政六年「ムラビヨフ」トノ談判不調トナリタルヲ以テ、幕府ハ之カ對策トシテ箱館奉行ニ對シテ政府ノ方針ヲ傳ヘ、露國ハ樺太全島ヲ其所領ト心得居レルヲ以テ北緯五十度以南ハ露人居住スルトモ之ヲ咎メ難ク、軍艦來航、軍隊上陸及陣營建築ヲ爲ストモ其意ニ任セ當方ヨリ手荒ノコトヲセサル様措置方内訓セリ。然レトモ我漁民ハ引揚ケシメサルノミナラス漁民其他ノ移住民ヲ増加シ以テ我方領有ノ實ヲ示スノ施策ヲ爲セリ。

(一) 久春古丹(楠溪)勤番所
詰所「ポロアントマリ」(大泊)、「シンシャ」(鈴谷即貝塚海岸)、得高(留多加)、「チベシヤニ」(小レリ)。

(二) 斯クシテ我方ノ警備モ大ニ整ヒ來リ文久二年(一八六二年)現在左ノ勤番所及詰所ヲ有スルニ至レリ。

- (ロ) 實郎長濱、「トウブツ」(遠淵、塔淵)
- 詰所「リヤトマリ」(利屋泊)
- (ハ) 西富内勤番所
詰所「トコンボ」(吐鯉保)、「ノダサン」(野田)
- (ニ) 輪荒勤番所
詰所「シララオロ」(白浦、白瀨)、「シコウキウシナイ、オチャボカ」(落帆)、「トンナイチャ」(富内)、「アイロウ」(愛郎)、「マクシコタン」(馬群潭)、靜香臨時派遣所
- (ホ) 久春内勤番所
詰所「シララオロ」(西白浦)、「ナイヨロ」(名寄)、「ウシヨロ」(鶴城)

(参考) 樺太居住邦人ノ狀況
一、樺太居住邦人及露人ノ數
樺太ニ於ケル本邦人ニ付テハ人民ハ漁期中出漁シ秋歸國スルモノ多ク、冬期殘留スルモノハ番人ト同地勤務ノ諸官員並ニ其使用人大部分ヲ占メ他ノ永住者極メテ少數ナルカ、明治二年八月外務省ヨリ出張セル城山靜一ノ巡見復命書ニ依レハ同地ノ邦人及露人數左ノ如シ。

地名	邦人	露人	備考
久春	10	19	
古丹	10	19	
同領鈴谷ヨリ「オフエトイヨ」 迄十ヶ村	393	1	
泊	150	105	

「リヤトヤリ」	足輕四	人夫一三	五	五八		
「白主村」	二	人夫一三	五	九〇		
「西富内」	三	人夫四	二	五三六		
「久春内」	三	人夫四	二	八四		
「鶴城」	一	六九	五	二七		
「シララホロ(西白浦)」	一	六九	五	二七		
「ナヨロ(名寄)」	一	一〇	四	一〇		一八六九年渡來
「シルトタシナイ」	一	一〇	四	一〇		
「ラア(輪壳)」	一	一〇	四	一〇		
「ククンロタン(馬群潭)」	一	一〇	四	一〇		
「シイカワ(敷香)」	一	一〇	四	一〇		
「アアノイ(麻内)」	一	一〇	四	一〇		
「ノダサン(野田)」	一	一〇	四	一〇		
「ナイアツ」	一	一〇	四	一〇		
「東トシナイ(富内)」	一	一〇	四	一〇		
「アアノイ(小賣)」	一	一〇	四	一〇		
「ホシシニ(小賣)」	一	一〇	四	一〇		
「ホシシニ(小賣)」	一	一〇	四	一〇		
「アラコイ(アルコイ)」	一	一〇	四	一〇		
「アアノイ」	一	一〇	四	一〇		
「アマコイ」	一	一〇	四	一〇		

一〇六

計 外ニ「ダライカ」人 五六 一二三 一一二 二〇七七 二八〇〇
 其 他 九〇〇 二〇〇

二、炭 坑
 石炭山ハ明治二年城山ノ調査ニ依レハ左ノ六ヶ村ニ十ヶ所アリ。

「ナメシヤニ」(小賣) 三ヶ所
 「トシナイ」(富内) 二ヶ所
 「トロンボ」(吐銀保) 二ヶ所
 「マシニコタン」(馬群潭)「ノア」及「カシホ」各一ヶ所

三、漁 業
 樺太ニ於ケル邦人漁業者ハ漁期中内地ヨリ出稼スルモノニシテ漁獲物ハ松前及箱館ニ輸出スルモノナルカ明治二年ノ調査ニ依レハ漁獲高左ノ如シ。

「ナメシヤニ」	八〇〇	五五〇	一〇〇	一、四五〇
「イシコアナイ」	二五〇	一五〇	一〇〇	五五〇
「ザアエマツ」	一五〇	一〇〇	一〇〇	三五〇
「カマトマ」	三〇〇	二〇〇	三〇〇	七〇〇
「ホラフネ」	一〇〇	一〇〇	一〇〇	三〇〇
「ナエオンナイ」	一〇〇	一五〇	一〇〇	三五〇
「トオフツ」(遠海)	三五〇	三五〇	三五〇	一、〇五〇
「ガナナ」	一五〇	一五〇	一五〇	四、三五〇
「ヤマベツ」	一八五〇	一、六五〇	七五〇	四、三五〇

明治七年樺太千島交換條約ニ依リ從來特許ヲ以テ釐稅ヲ免シ漁業ヲ許可セラレ居リ且ツ今後モ自由ニ漁業ヲナシ得ル漁場ノ所在地獲高左ノ如シ。

一〇七

- 左ノ如シ。
- 一、楠 六ヶ所
- 楠溪 大泊 「チナイ泊」 「ユツトタンナイ」 「ウシラ」 「ウシエンナイ」
- 一、小 實 一ヶ所
- 一、東 富 内 四ヶ所
- 東富内二ヶ所 「オチヨボカ」 「アエロフ」 (愛郎)
- 一、榮 濱 三ヶ所
- 榮濱 「ロレイ」 「ホロエンルンガ」
- 一、靜 河 十二ヶ所
- 「ヨウコツ」 「ウフナイホ」 「ハツヘト」 靜河 「チタシウス」 「ナカシマ」 「サツカリ」 「トマメト」二ヶ所 「エルンモイ」
- 「アシケ」 「タランユタン」
- 一、西 富 内 十三ヶ所
- 西富内 「テイ」 「アツケフツ」 「ヒロチ」 「チホトマリ」 「チニチュア」 「ウエントマリ」 「ホロトマリ」 「ラクマカ」 「ハチコフシ」 「トマリガ」 「チラントマリ」 「トウコタン」
- 一、西 白 二ヶ所
- 西白 「メンホナイ」 (邊志保)

第二項 現地事件ニ關スル交渉問題

露國ハ樺太ノ自國領タルコトヲ主張スルノミナラス之ヲ確保スル爲同島南部海岸ノ便利有益ナル地ニ移民ヲ送ルト共ニ、軍隊ヲ派遣シ軍事施設ヲ爲シ、家屋道路ヲ建築シ石炭ヲ開採シ又同地ヲ流刑刑事犯人ノ收容地トシタルヲ以テ、我方ハ之ヨリ生起スル弊害ヲ除去スル爲分界ニ依リ問題ヲ根本的ニ解決セントセルモ先方カ之ヲ應諾セザリシニ依リ、不得已出稼人ヲ増遣シ開拓ヲナシ我領土權確保ノ實效ヲ期サント努ムルニ至レル結果、自然ノ成行トシテ現地ニ於テハ各種事件ノ頻發ハ不可避トナリ而

モ事件ノ性質ハ益々惡北シ憂フヘキ事態ヲ現出シ彼我官憲ノ交渉ハ困難ヲ加ヘタリ。仍テ幕末ヨリ樺太千島交換ニ至ル迄ノ現地事件ニシテ日露兩國間交渉問題トナリタルモノノ中主ナルモノノ概略ヲ次ニ擧クヘシ。

一、「ナイブツ」(内淵)陣營建築問題

慶應二年(一八六六年)十月下旬露國ハ「フィルツフ」少尉ヲシテ「ナイブツ」ニ陣營(「ポスト」)ヲ建築セシメタルヲ以テ定役篠森ハ南部ニ於テ露國側カ陣營ヲ建築スルハ不都合ナルニ付日本政府ヨリ何分ノ下知アル迄右工事ノ見合方ヲ申入レタル處、先方ハ上司ヨリノ命令ナレハ日本側要求ニ應ジ難キ旨答ヘタリ。依テ露曆一八六八年二月七日久春内ニ於テ調役長谷川新之助ヨリ露國側樺太長官「デヰテ」大佐ニ交渉シタル處、同様に上司ノ命ナレハ如何トモ致方ナキ旨答ヘタリ。

尙慶應三年露國ハ遠淵(搭淵)ヲ再占シ陣營ヲ設ケ一隊ハ長濱ニ據リ、又二百五十人餘ノ露人ハ久春内ニ兵營及移民ノ家屋ヲ建築セリ。而シテ明治二年七月二十七日軍艦「マンジュール」號ハ兵二百人、武器及彈藥ヲ積ミ「ニコラエフスク」ヨリ「ブシイ」(遠淵)ニ寄港、數日後東部西伯利總督モ汽船「アメリカ」號ニテ遠淵ニ來リ共ニ函泊ニ向ヒ、八月四日頃汽船「ワストク」號ハ建築用材、糧食等ヲ積ミ又同月十二日汽船「ナホドカ」號モ大砲彈藥ヲ積ミ遠淵ニ來レリ。明治二年十月英船「ジョリ」號船長「オドリスコル」ノ報告ニ依レハ當時遠淵ニハ露兵三、四十人砲六門アリ、函泊ニハ露兵三百餘有リ、「バラオンドマリ」(保呂安泊、函泊ヨリ二哩)ニ露兵十人、「チベシヤニ」(長濱)ニ露兵二十人、六月及「ポスト」アリ、「アニワ」灣沿岸合計千人有リ、又「ベシエンス」(「テルベニエ」)灣沿岸ニハ「アエロフ」、「オチヨボカ」、「タコイ」、「ノダサン」、「ナヨロ」、「アイ」、「ナイブツ」、「シツカ」、「マノイ」

(真鏡)等ニ露人各十乃至二十人宛居リタル趣ナリ。
二、「オチボカ」石炭採掘権問題

明治元年(一八六八年)八月在遠洲露國長官「デブレラドヴィチ」少佐ヨリ在久春古丹箱館府權判事岡本監輔ニ對シ書翰ヲ以テ、前年來露國鑛山技師「カピタン、ワッパチン」ヲシテ調査發見セル石炭山「オチボカ」ニハ露國所屬ナル旨ノ高札ヲ建テ置キタルカ右炭坑ハ近日採掘スヘキ旨通報シ來レリ。之ニ對シ我方ハ樺太ニ於ケル石炭山ハ從來我方ニ於テ發見シ置キタルモノニシテ「オチボカ」ハ勿論「ナヤシ」登穂、久春内以北ノ諸處モ追々採掘スル計畫ナル趣ヲ回答スルト共ニ他方我方ニ於テモ若干採掘シタリ。之ニ對シ翌二年三月十日(四月二十一日)「デブレラドヴィチ」ヨリ書翰ヲ以テ、露國側ニテ發見シタル炭坑ヲ採掘シ又高札ヲ撤去シタルコトヲ抗議越スト共ニ右高札及採掘炭ノ返還方ヲ要求シ、若シ日本側ニ於テ發見セルモノナラハ何故ニ其所屬ヲ表示スヘキ高札ヲ建テ置カサルヤ、今後同様ノコトアルニ於テハ露國側モ同様ノ手段ヲ執ルヘシト申越シタリ。依テ我方ハ元來此地ハ我國ノ地ナレハ別ニ其標ヲ設ケスト回答シ、同月十六日開拓大主典東善八郎ハ遠洲ニ赴キ「デブレラドヴィチ」ト交渉ノ上解決スル迄ハ双方ニテ手ヲ付ケサルコトニ定メタリ。然ルニ露國側ハ種々異論ヲ唱ヘタルニ依リ談判ノ結果採掘方ヲ見合セ番人ヲ置キ監視セシメタリ。

然ルニ露國側ハ明治二年春「オチボカ」ニ石炭採掘夫用家屋ヲ建テ又我方漁場ヲ妨害セルコトアリ。五月二十六日(七月五日)岡本權判事ハ「デブレラドヴィチ」ニ對シ、露國ハ樺太ヲ日露及土人三屬雜居ノ地トナシ居ルモ小出大和守ノ定約ハ外國ト國境ヲ定ムル權能ナキ徳川將軍ノ臣下ニシテ僭越不都合ノ次第ナリ、今ヤ日本ハ天皇萬機親政復古ノ世トナリタルニ付樺太問題モ改メテ兩國政府間ニ交渉解決スルノ要アリ、依テ右決定迄ハ勝手ノ處置ヲ爲ササル様申入レタリ。右ニ對シ六月十三日(七月二十一日)先方ハ上司ノ命ニ依リ定約ニ基キ萬事ヲ措辨シ居リ、假令新定約アルトモ上司ヨリ訓令ナキ間ハ從來通り樺太ハ日露及土人三屬ノ地ナレハ露人モ日本人ト同様ニ漁業ヲ爲ス心得ナリトテ我方ノ申入ヲ拒否シ來レリ。

三、千遍實(小實)詰所使用人抑留事件

明治二年五月十七日小實詰箱館府從事東善八郎ハ權判事ノ書翰ヲ屆ケル爲遠洲ノ露館ヘ赴キ用濟ノ後例ノ如ク酒肴ノ饗應ヲ受ケタルカ、東ノ從者榮作カ土人嘉四郎ト口論セル際露兵「ヘーステレコフ」ヲ毆打シ官服ノ記章ヲ挽キ取リタリト翌十八日「カルベンコ」ナル者通譯及兵卒七、八名ヲ引率シ日本詰所ニ來リ加害者引渡シヲ要求セルヲ以テ、東ハ之ニ應セス自ラ遠洲ヘ赴キ「デブレラドヴィチ」少佐ニ面會シ、日露人間ニ事件アリトモ罪人ノ處罰ハ各自ノ法律ニ依リテ處斷スル規定ナルニ不拘兵隊ヲ以テ我方從者ヲ拘引セントスルハ不都合ニシテ而モ口論ハ露側饗應ノ酒ノ上ノ事ナルニ依リ斯クノ如クハ饗應ナトセサルニ如カスト述フルト共ニ、我方從者ヲ取調ヘタルモ露國側兵卒ニ加害セルカ如キ事實ナキ旨抗議シタルニ、先方ハ實ハ自分モ貴官ト相手シ醉中ナリシ爲事實ノ取調モ不充分ナリシニ付今後ハ通辯等ヲシテ書面ヲ以テ交渉セシメ兵卒ヲ差遣スカ如キコトナキ旨ヲ釋明シタリ。

五月二十六日(七月五日)岡本權判事ハ「デブレラドヴィチ」ニ對シ、露國側カ兵力ヲ以テ無辜ノ我人ヲ召捕ラントセルコトハ國際慣例ノ規定ニ悖ルモノナル旨ヲ抗議シ、今後ノ處置振ニ付質問スル所アリタリ。之ニ對シ(七月二十一日?)「デブレラドヴィチ」少佐ヨリ、本件ハ露國兵卒ヲシテ失禮シタル者ヲ召捕ヘシメ一應吟味ノ上直ニ返ス積ニテ兵ヲ差出シタルモ、東氏ト談判ノ通りノ次第ニテ解決

シ今後ハ右様ノ場合犯人ハ召捕ルコトナク差留メ置キ書翰ヲ以テ交渉スヘキ旨ヲ回答シ來レリ。

四、「ハコドマリ」家屋及道路建築並ニ墓地使用問題
明治二年六月二十三日露國汽船一隻多人數ヲ輸送シテ母子泊(函泊、「ハコドマリ」)ニ來リ家作シタルヲ以テ河原從事ハ「デブレラドヴィチ」ト會見シ、右建築ノ爲土人墓地ハ荒サレ漁業者ノ魚干場カ妨害セラレタルニ依リ建物ヲ引拂ハレ度旨申入レタル處、先方ハ元來差支ノアル場所ニハ建築セサルコトト爲シ居ルモ右ハ上司ノ命令モアリ且ツ條約ニ依リ引拂ニハ應シ難キ旨ヲ答ヘタリ。
又六月下旬露國人十人許リ保呂安泊ヘ來リ家作ヲナストテ日本人ノ畑地ニ手ヲ下シ、約二小隊ノ露兵土人墓所ノ垣ヲ拔捨ツヘキ形勢アリタルヲ以テ七月二日(八月九日)東從事ヨリ抗議スル所アリタルニ、「デブレラドヴィチ」ハ日本側ハ墓地ニ非サル所マテ墓標ヲ建テタリト聞キ立腹ノ上兵ヲ差向ケタル次第ナルモ右カ事實墓地ナルニ於テハ自分ノ行動ハ過失ナリト陳謝セリ。其後露國側ハ建築ノ爲墓地垣抗ヲ處々取捨テ穴ヲ掘リ假小屋ヲ建テタルヲ以テ七月二十二日(八月二十九日)我方ヨリ抗議シタルニ、先方ハ右垣ヲ結直シ假小屋ヲ片付クヘキヲ約セリ。
次ニ露國人函泊ノ土人墓地及網干場ニ道路ヲ開築セシヲ以テ、同年十二月末大築中譯官及丸山外務大丞ヨリ「デブレラドヴィチ」中佐ニ對シ抗議セル處、墓地藩籬ノ復舊ハ直ニ應諾シタルモ道路ノ附替ニ付テハ我方ノ反復抗議ニモ不拘上司ノ命ナリトテ應セサリキ。
又靜河(敷香)ニ於テハ明治二年七月「デヴィチ」大佐指揮ノ汽船ニテ露人約七十人到着上陸シ、同地ヨリ「ラツチン」迄ノ山道切開ノ爲人夫小屋ヲ魚干場ニ建築セント工事ニ着手シタルニ依リ、七月十五日勝見給事ヨリ抗議シタルモ先方ハ之ニ應セサリキ。

五、函泊波止場事件

明治三年一月露國ハ函泊ニ波止場ヲ築カントセル處、右ハ漁業ニ妨害アルヲ以テ我方ハ之ヲ許サザリシモ、先方ハ之ニ聽從セザリシノミナラス我方ヨリ遣シタル監視員川島權太録等六名ヲ捕縛セリ。右ニ付丸山外務大丞等上京シ事情ヲ報告シタルカ、我方ヨリ嚴重交渉ノ結果露國ハ右六名ヲ釋放シタリ。

六、露人盜賊事件

明治三年伊達、栖原兩氏所有ニ係ル山上ノ藏カ切破ラレ酒、衣服等竊取セラレタルヲ以テ、翌夜竊ニ番人ヲ置キ賊四人ヲ捕ヘ之ヲ糾問シタル處、露國軍隊「シュワン」ノ部下ノ兵ニシテ前夜盜ミシコトヲ白狀セルヲ以テ之ヲ隊長「チャチニコフ」ニ引渡セリ。

七、露人ノ邦人殺害事件

(イ) 明治四年八月函館ノ市藏ナル者歸郷ノ爲楠溪ヨリ獅子谷(鈴谷)ニ至リ露人三名ノ船ヲ泛ヘルヲ見付ケ渡船ヲ頼ミタルニ、彼等ハ市藏ノ所持金ヲ見之ヲ縊リ殺シテ屍體ハ附近ノ草原ニ遺棄シタリ。當時犯人ヲ搜シ出ス能ハサリシモ流刑人「バットリケヴィチ」ハ明治五年自首シ出テ犯罪ノ詳細判明セラルカ、他ニ兵卒一名モ共犯者ニシテ奪ヒ取りタル金ハ三人ニテ分配セル旨供述セル趣ナリ。

(ロ) 明治五年一月釜泊ニ於テ藤次郎外二名ノ本邦出稼漁夫ハ露國逃走流刑人「ワルワレンコ」外三名ニ放火ノ上殺害セラレ諸品ヲ盜マレタリ。右犯人ハ露國官憲ニ於テ山中ニ潛伏中ヲ逮捕シ日本官憲立會ノ上取調ヘタルカ、犯罪ニ付白狀セザリシモ證據充分ニシテ彼等ノ所爲ナリシコトニ決定セリ。右兩事件ニ付テハ帝國政府ヨリ在本邦露國公使ヘ交渉シタル處、露國側ハ右ハ重罪ナルニ依リ「ニコラエフスク」ニ於テ裁判ニ付シ審理中ナル旨回答シタルカ、裁判ノ結果ニ關シ我方ヨリ督促セル處、



明治六年八月三日「ビュツォフ」ハ沿海州知事ニ照會セルモ未タ裁判決定セサル旨ヲ回答シ來レリ。其後
明治七年三月露國公使「オラロフスキイ」ヨリ獅子谷ニ於ケル犯人ハ終身重懲役ナル最重刑ニ處セラ
レタル旨通知アリタリ。明治七年八月二十日在露榎本公使ハ露國外務省亞細亞局長代理「オステン、
サウケン」ニ對シ、露國政府カスノ如キ重罪人ノ裁判ヲ長引カセ何等ノ措置ニ出テナルコト及獅子谷ノ
犯人一名ハ兵ナルニ之ニ對シテハ何等ノ處置ナキコトヲ責メタルニ、先方ハ只電報ヲ以テ照會スヘシ
トノミ答ヘ、又前記犯人タル兵ハ大陸ニ逃レタルカ右ハ嫌疑者ニテ犯人ノ確證ナシ等述ヘタリ。
八、函泊出火事件

明治六年三月二十六日「ハコドマリ」ニ於テ伊達、栖原兩氏ノ所有ニ係ル漁具入り板藏火災ニ罹リ其際
番人等消防ノ爲出張シタルニ、露國兵約二小隊來リ邦人ノ携行セル龍吐水二挺ヲ奪ヒ之ヲ火中ニ投シ
消防ヲ不能ナラシメ、且ツ濱手ニ埋伏シタル露兵ハ邦人ニ砲及燃杭ヲ投付ケ通行ヲ妨害シ、又濱手ニ積
ミ在リシ鮭粕製造用新約二百間ニ放火燒失セシメ、更ニ山手ノ番屋ヲ破毀セントセル事件アリタリ。
右事件ニ當リ堀開拓幹事ハ露國守備隊長「チャジョロフ」大尉ニ交渉シテ番屋ノ取毀ヲ止メシメ、越テ同
二十八日「チャジョロフ」方ニ到リ出火ノ顛末ヲ述ヘ露人ノ所爲ナリト論議シ、其後我官員立會ノ上兵卒
ヲ糾問シタルモ其實ヲ得サリキ。新曆八月五日堀幹事ハ「チャジョロフ」ノ後任「チアルノフ」大尉ニ對シ
本件火災ハ露兵ノ所爲ナリト嚴重交渉セル處、先方ハ藏ノ燒ケタルハ露兵ノ所爲ニ非ス、薪ノ燒ケタル
ハ飛火ナルヤモ知レス、龍吐水ハ兵器ト見誤リタルナラン等辯解シタルモ、燒ケタル薪ハ漁民ノ積置キ
タルモノナレハ露側ヨリ償ハハ穩便ニ事済ムヘシ等ト答ヘタリ。
我現地官憲ハ右火災事件ト同時ニ事件直前ニ於ケル露兵ノ暴行等ヲ報告スルト共ニ現地警備増強方

建白セルヲ以テ、帝國政府ハ七月二十日露國代理公使ニ右事件ニ關スル一件書類ヲ送付シタルニ、「ビュ
ツォフ」ハ八月二十日附ヲ以テ、出火事件ニ關スル事件ノ真相未タ判明セサルモ充分ノ調査ヲ要スヘク、
樺太ノ諸事件調査方ニ付テハ本邦ヨリ露國ニ赴クヘキ露國軍艦ヲ「アニア」海ニ回航シ調査スル様依頼
シ置キタリ、又樺太ニ於テ發生セル諸事件ニ對スル露國現地官憲ノ措置ニ遺憾ノ點ヲ認ムルモ更ニ取
調ヲ要スル旨ヲ回答シ來レリ。帝國政府ハ更ニ八月三十一日露國代理公使ニ開拓官憲ヨリノ報告ヲ送
付スルト共ニ之等樺太島ニ於ケル事件ヲ重大視シ、九月「ビュツォフ」ト話合ノ上我方ヨリ宮本外務大丞
ヲ、他方露國公使館ヨリ屬官「エルニチキイ」ヲ樺太ニ派遣シテ事實ヲ取調ヘシムルコトトセリ。右宮
本大丞ノ取調ノ結果藏ノ火災ノ原因ハ未タ判明セサリシモ、龍吐水ヲ奪ヒ消防ヲ妨グ石ヲ投付ケ日本
人ヲ毆打セルハ東部西伯利第四「リネイヌイ」大隊所屬兵ノ所爲ニシテ、薪放火犯人嫌疑者ハ更ニ取調
ノ必要アルモ「チャジョロフ」大尉ノ取締不充分ニ起因スルコト明瞭トナレリ。

第三項 明治維新後ノ帝國政府ノ對樺太方針

一、樺太行政制度

明治元年（一八六八年）四月十六日箱館奉行ノ代リニ箱館裁判所ヲ設ケ總督ニ嘉彰親王、副總督ニ清
水谷公考及土井利恒（元ノ能登守）ヲ任シ、同年閏四月二十八日箱館裁判所ヲ箱館府ニ改メ清水谷公
考ヲ總督ニ、土井利恒ヲ副總督ニ任シ、舊幕時代ヨリ樺太ニ在リシ岡本監輔ヲ權判事ニ任シ樺太ニ關
スル一切ノ事務ヲ委任シ、長濱ノ役所ヲ公議所ト稱セリ。
明治二年七月八日箱館府ヲ廢シテ開拓使ヲ置キ北蝦夷ヲ樺太ト改稱ス。樺太ハ依然北海道開拓使ノ管
下ニ在リシカ明治三年二月十三日樺太開拓使獨立シ、五月富内、西白瀨（西白浦）及白主ニ出張所ヲ

置キ、六月楠溪ノ公議所ヲ裁判所ト改メ、開拓使次官ハ樺太開拓使ニシテ黒田清隆來任セリ。翌四年八月樺太開拓使廢サレ北海道開拓使ノ管轄ニ移リ、明治五年九月楠溪裁判所ハ樺太支廳ト改稱シ其出張所ハ改廢頻々タリシカ、同年十月小實、西富内、鶴城、築濱、靜河(敷香)、白濱ニ在リタリ。

一一六

二、帝國政府ノ對樺太方針
明治維新前後國內騷擾ノ裡ニ於テモ帝國政府ハ北邊警備ニ付テハ常ニ異常ノ注意ヲ拂ヒ居リ、箱館ノ亂鎮定ノ際箱館府總督清水谷公考ハ露國南下ノ形勢ニ鑑ミ幕軍カ露人ノ援助ヲ得テ事ヲ起サンコトヲ慮リ北地警備増強方ヲ政府ニ建言スル所アリタリ。而シテ明治二年(一八六九年)露國カ函泊ニ兵營ヲ建築シ兵員ヲ送り來ルヤ帝國政府ニ於テハ一方樺太ノ開拓警備ノ増強ヲ圖リ、他方露國ニ對シテハ事端ノ發生セサル様努メタリ。

(一) 樺太開拓施策

露國南下ノ形勢ニ付關心ヲ有シ露國側ノ施策ニ關スル情報ヲ我方ニ供給シ時ニハ忠告ヲ與ヘ居リタル英國公使「パークス」ノ質問ニ對シ、明治二年八月九日(九月十四日)岩倉大納言、鍋島、澤外務卿、寺島外務大輔、大隈大藏大輔同席ニテ蝦夷、樺太及千島ニ關スル露國トノ關係ニ付政府ノ所見ヲ述ヘタルカ、就中樺太ニ關シテハ、(一)開拓ニ付テハ先ツ樺太ヲ開キ然ル後ニ宗谷ヲ固ムルコトトシ、今年來ルヘキ露兵千二百人ニ對シ我方ハ今五、七百人ヲ、又九月中旬迄ニハ役人及移民業千四、五百人ヲ送ルヘク、(二)樺太ニ於ケル境界ニ關シテハ曩ニ一八六二年露國側ト談判ノ約定アリテ露國側ハ委員ヲ出シタルモ我方ヨリ官員ヲ遣ササリシヲ以テ其儘トナリ居レルカ、小出大和守ノ交渉ニ基ク

雜居ハ其後弊害ヲ來シタルヲ以テ露國政府ト再應交渉ヲ開始スル積ナリトノ趣旨ヲ開陳シタリ。而シテ右境界問題交渉ハ本章後節ニ述フル如ク米國ニ斡旋ヲ依頼シタリ。

帝國政府ハ樺太ニ於ケル事件頻發ニ對スル措置トシテ露國側トノ交渉及開拓ノ任務ノ爲丸山外務大丞及谷元外務權大丞ヲ樺太ニ駐在セシムルコトトシ、明治二年八月八日(九月三十日)澤外務卿ヨリ右兩官ニ對シ左記要領ノ訓令ヲ與ヘタリ。

(一) 樺太出張ノ際露國側トノ應接ハ本條約及小出大和守雜居ノ約束(樺太假規則)ヲ遵奉シテ之ヲ爲シ若シ不行届アラハ露國開拓長官所在地ニ出向キ談判スヘシ、若シ右兩條約ニ違背セス且ツ和親増進ニ資スヘキモノアラハ之ヲ約スルモ差支ナシ

和戰ノ決ハ政府ニ請訓スヘシ

(二) 條約締結ニ付テモ政府ニ請訓スヘシ

(三) 尙交渉及地方ノ事情ニ付テハ其都度政府ニ報告スヘシ

(四) 尙同年八月外務省ハ城山靜一ヲ樺太ニ出張セシメ全島ヲ巡見セシメタリ。同年九月東久世開拓長官赴任ニ當リ三條右大臣ハ開拓方針ニ關スル論達中ニ於テ「樺太ハ露人雜居ノ地ナルヲ以テ禮節ヲ主トシ條理ヲ盡シ決シテ輕率大業ヲ誤ル所業アルヘカラサルコト」ト訓令セリ。

明治二年九月十日(十月五日)開拓長官ヨリ北海道及樺太ニ關シ建議アリタル處、其中樺太ニ關シ(一)久春古丹ヲ開港シ外國ノ垂涎ヲ止ムルコト及(二)樺太雜居ニ付テハ可成穩便ノ取計ヲナシ臬威ヲ立ツヘキモ萬一露國側ヨリ狡黠ヲ以テ暴烈ニ取掛ルニ於テハ詰合ノ人數ハ勿論兵隊ヲ以テ之ヲ打壞スヘキ仕組ヲナスコトアリタリ。右ニ關シ政府ヨリ諮問アリタルニ對シ外務省ハ(一)ニ對シテハ樺太

一一七

ハ雜居ノ地ニシテ我方ノ一存ニテ開港ハ成シ難ク之カ實行ニハ露國其他條約國ト折衝ヲ要スヘキニ付暫ク見合スヲ至當トスルコト及(二)ノ樺太雜居ノ儀ハ假令暴烈ニ出ツルトモ政府間ノ交渉ニ依リ解決ヲ圖ルヲ至當スルコトヲ答申セリ。先之八月十一日政府ハ樺太、根室及宗谷(各出役及舊幕府降伏人五百人宛ヲ、石狩ハ降伏人男女三百人、箱館ハ庄内兵隊一大隊ヲ送ルヘキ命令ヲ發シタリ。右ニ關シ九月二日(十月七日)外務當局ヨリ各國公使ニ對シ又九月九日露國領事ニ對シ、樺太へ出稼ヲ希望スル者ニ今般之ヲ許シタルカ右取締ノ爲官吏ヲモ派遣セル旨ヲ通告スル所アリタリ。

(二) 日露戰爭說

露國南下ニ對シテハ我邦ニ於テ武力ヲ以テ之ヲ擊攘スヘシトノ硬論ヲ唱フルモノ漸ク多ク、前記我邦ノ開拓方策實行ヲ見テ日露開戰說ヲ生シ、爲ニ明治二年十月二日在函泊露國軍隊長「デ、ブレラドヴィチ」中佐ハ岡本開拓判官ニ對シ、前年久春古丹へ兵糧ヲ載セ來リシ米國帆船員ハ日露開戰說ヲ流布セル由ナルカ右噂ノ根據ナキコトヲ東京政府へ報告アリ度旨申越セリ。而シテ同年十一月九日(十二月十一日)在京米國公使「デ、ロング」ヨリ外務卿宛ニ、最近日本政府カ北方ニ遠征隊ヲ派遣セルコトニ關シ何分ノ情報ヲ得タク、箱館ヨリノ情報ニ依レハ右ハ最近樺太南岸ニ駐屯セル露國軍隊ニ對ズル抗敵行爲ノ準備ナリトノコトナルカ本國政府へ報告ノ必要アルニ付回報ヲ得度旨申越シタリ。之ニ對シ政府ハ十一月十五日附ヲ以テ、先般外國船ヲ以テ北部へ人民ヲ移住セシメタルハ專ラ開拓ノ目的ニテ之カ保護ノ爲諸官民ハ差出シタルモ兵士ハ出サス、軍艦モ箱館ニ在リテ其以北ハ赴カサル處露國トノ戰爭說ハ訛傳ナル旨ヲ回答セリ。

(三) 「カラフト」島規則書無效說

維新後我地方官憲中ニハ維新ニ依リ舊幕時代ノ條約殊ニ小出大和守ノ約定ハ無効ナルヤノ說ヲナスモノアリ。明治二年十二月在箱館得能開拓權判官ハ先般露國領事ヨリ日本人民多數ノ樺太移住及官吏出張ニ關シ質問越セル次第アルニ付樺太ノ所屬問題ニ關スル先方ヘノ回答振ニ付同訓ヲ得度旨ヲ請ヒタルヲ以テ、政府ハ外務省評議書ヲ以テ、「サガレン」カ我國所屬ニ相違ナキ旨ヲ外國ニ對シ確ト證明スヘキ程ノ實證モナキカ故ニ不得已雜居ノ條約トナリ居レルカ、結局ハ空論ヲ棄テ實效ヲ立テ下手ノ先後ヲ爭フ方現情ヨリシテ適當ノ策ト認メ今般開拓使及外務官員ヲ差遣シタル次第ナレハ同島所屬ノ論證ハ先方ヨリ申出ツルトモ別段辯解スル等ノコトナク、又小出大和守ノ假規則及人民移植、全地恢復等ノ論モ申開ケス、實地ノ處置ノ付クマテハ下田條約及小出ノ假規則通リト心得ラレ度旨同訓セリ。

三、樺太問題ニ關スル關係官員ノ意見

(一) 丸山 大丞

丸山外務大丞一行ハ明治二年九月二十二日久春古丹ニ着シ翌年七月歸京シタルカ、十月朔日樺太事情ノ報告ト共ニ意見書ヲ提出シ更ニ十一月同地施策改正意見ヲ稟申セリ、其要旨左ノ如シ。
一、樺太ノ風土ハ豫想外ニ好ク開拓ニ適スヘシ
一、露國カ樺太ノ經營ニ力ヲ盡スハ歐洲ニ於ケル發展ヲ英佛ノ爲ニ阻止セラレタル爲東方及南方ニ向ヘルモノニシテ樺太千島ニ地歩ヲ確立シタル上南下シテ北海道及日本ニ迫リ又朝鮮支那印度ヲ併合セントスルモノナルコトハ先年ノ對島事件等ヲ以テ觀ルモ明ナルヲ以テ樺太ノ開拓經

營ハ重大性ヲ有ス

- 一、樺太ニ於ケル境界ヲ正サバ地ヲ割テ露國ニ與フルコトナリ、雜居ノ儘ニ置クコトハ彼ヲシテ勝手ニ振舞ハシムルコトトナリ、現地ニ於ケル交渉ハ條理ノミ立ツモ所謂暖簾ニ腕押ノ姿ナリ
- 一、當面ノ急務トシテハ工匠ハ勿論降伏人乞食捨兒僧侶ノ如キ内地ニ不用ノ者ヲモ樺太ニ遷移シテ彼ヲ壓制シ彼ヲシテ自ラ退ク様ニナスヲ要ス
- 一、樺太内地間、樺太沿岸航路、樺太内ノ交通運輸ノ改善及穀物野菜ノ種子供給ヲ爲スヲ要ス
- 一、洋人ヲ雇用シ戸籍稅法ヲ整フルヲ要ス
- 一、樺太警備策トシテハ先ツ北海道ノ開拓及警備ノ充實ヲ爲シ箱館ノ府ヲ地方中心タル石狩ニ移シ強大藩ヲシテ鎮守セシメ、樺太ニ於テハ外務開拓ノ兩機關ヲ合併シテ靜河(敷香)ニ陸奥ノ鎮守府ヲ移シテ之ヲ總括セシメ諸郡ニ郡令ヲ置キ、又奥羽ノ降伏人ヲ農兵ニ取立テ軍團ヲ置キ之ヲ給養ノ爲奥羽ニ於テ十萬石相當ノ地ヲ附屬セシメ汽船ニ隻ヲ運送船トスルコトヲ要ス

(二) 宮本權大錄

外務權大錄宮本類三ハ依命樺太ニ出張シ開拓ノ便宜及露人ノ情形ヲ觀察シ復命セル處其意見書ニ於テ、先ツ雜居ノ制ヲ改メ境界ヲ確定スルニアラサレハ開拓ノ功ヲ期シ難シ、然ルニ露國側ハ人ヲ増シ力ヲ用ヒ器械ヲ備ヘ駁々乎トシテ勢力ヲ増強シツツアルニ我方カ氣候風土ノ好キ内地ヨリ人民ヲ移住セシムルコトハ困難ナリ、而モ現今各藩共財力乏シク之ニ力ヲ用ユル能ハス、依テ當今十全ノ策ハ樺太ノ中央山川其他境界分割ニ適スルノ地ヲ撰ヒ境界ヲ嚴定スヘク、若シ右提案ニ對シ露國側カ應

(三) 「モンブラン」伯

セサルニ於テハ英佛ノ輿論ヲ喚起スヘシト云ヘリ。
 明治二年十月十日(十一月十三日)日本公務辦理職佛人「モンブラン」伯ハ政府ノ諮問ニ對シ澤外務卿宛ニ、樺太ニ於ケル露國側軍備ノ狀勢ハ朝鮮ヨリ日本迄侵略スルノ意圖ヲ有スルモノナリ、右ハ日本ノミナラス歐洲各國ニモ重大ナル關係ヲ有スルニ付日本政府ハ佛英政府ニ交渉シテ同政府ヨリ露國政府ニ對シ公法ニ依テ議論ヲ起スヨリ外ナシ、他面日本ハ軍備ノ増強ヲナシ之ニ備フルノ要アリ、之カ爲ニハ先ツ土工兵及砲兵ヲ組織シ樺太ヲ取戻ス準備ヲナス用意アルヘキナリト建言シタリ。

(四) 黒田 中 將

明治三年五月開拓次官ニ任命セラレタル黒田清隆中將ハ樺太開拓使トナリ北方各地ヲ巡視シテ九月歸京シタルカ、樺太ヨリモ北海道開拓ヲ急務トスヘキ意見ヲ述ヘ、「樺太日露雜居ノ形勢ヲ見ルニ僅ニ數年ノ安ヲ保ツヘキモ永ク親睦ヲ全ウスルヲ得ス」、「今速ニ之カ謀ヲ爲ササルヲ得サルモ北海道ノ近ヲ捨テ樺太ノ遠ニ及スハ策ニアラス」トシ、樺太ノ經路ニ三策アリ、「力ヲ無用ノ地ニ用テ他日益ナキハ寧ロ之ヲ願サルニ如カス、故ニ之ヲ棄ツルヲ上策トス、便利ヲ爭ヒ紛擾ヲ致サムヨリ一著ヲ讓リテ經界ヲ改定シ以テ雜居ヲ止ムルヲ中策トス、雜居ノ約ヲ維持シ百方之ヲ嘗試シ左支右吾遂ニ爲スコラサルニ至テ之ヲ棄ツルヲ下策ト爲ス」、然レトモ今速ニ棄ツルニ忍ヒサレハ姑ク之ヲ實際ニ試ムヘシトセリ。

其後黒田中將ハ米國ニ赴キ翌四年歸朝シ銳意北邊ノ開拓ニ當リ其結果樺太官制ノ改正ヲ見タルカ、明治六年五月同官ハ再ヒ政府ニ建言書ヲ提出シ從來ノ意見ヲ具申シ樺太統治ノ困難ニシテ成算ナ

キ事情ヲ述ヘ、樺太ハ楠溪ヨリ東北數香ニ至ル九十四里、西北鶴城ニ至ル百二十六里其間人口僅ニ三千七十三人内土人二千二百二十四人ニシテ明治五年ノ歲計ヲ金六萬圓米五千石トシタルニ餘剩ナク、地方曠荒、土地礫确、氣候寒烈ニシテ栽培ニ適セス、漁獵ノ收益モ從業者ニ衣食ヲ給スルニ足ラス、石炭採掘モ其費ヲ償フ能ハス、故ニ巨額ノ經費ヲ以テスルモ人民自立ノ産ヲ成ス能ハサルヘク、「則力ヲ無用ノ地ニ用ユルハ他日ニ益ナキノミナラス其害ヲ生スルニ至ル必然ナリ」、是ヲ以テ「樺太ノ如キハ始ク之ヲ棄テ彼ニ用ルカヲ移シテ速ニ北海道ヲ經理スル者今日開拓ノ一大急務」ナリトテ露國ノ「アラスカ」賣却ヲ引例シテ「名ヲ棄テ其實ニ就ク」ヘク英斷アランコトヲ願ヘリ。政府ニ於テハ外ハ臺灣事件、征韓論等アリ、内ハ財政ノ緊迫等ノ重大問題アルニ鑑ミ右建策ヲ容レ、樺太ノ紛争ヲ根絶シ北邊ノ安全ヲ期スル爲遂ニ樺太千島交換交渉ヲナスニ至レリ。

第三節 樺太問題ニ關スル交渉

前節ニ述ヘタル如ク樺太ニ於ケル事態ハ放置スヘカラサルモノアルニ鑑ミ帝國政府ハ明治二年米國政府ニ依頼シテ其斡旋ニ依リ露國政府ト樺太ニ於テ國境ヲ確定セントシタル處、偶々翌年十月來朝セル在清國露國代理公使「ビュツォフ」ノ言ニ依リ之ヲ中止シ、直接露國全權ト交渉セシムル爲副島參議ヲ「ボシエト」灣ニ派遣スルコトトセリ。我全權ハ函館迄赴キタル處露國全權タル沿海州軍務知事ノ更迭アリ、露國政府ハ「ビュツォフ」ヲ初代本邦駐劄公使ニ任命シ之ニ本件交渉ノ全權ヲ委任シタルヲ以テ、明治五年五月東京ニ於テ副島外務卿ト同公使トノ間ニ交渉ヲ開始セルカ妥結ニ至ラスシテ十一月交渉中絶シ、「ビュツォフ」ハ轉任先ニ向ヒ本邦ヲ去リタリ。

右交渉經過ニ付左ニ略述スヘシ。

第一項 樺太境界問題交渉ニ關スル米國ノ斡旋

明治維新前米國國務長官「シユワード」來朝ノ際、帝國政府ハ樺太境界問題ニ關シ斡旋方ヲ依頼セル處、同人ハ自分カ露國ヨリ「アラスカ」ヲ買収セル方法ニ倣ヒ日本側ニ於テ樺太ヲ買収スル方得策ナルヘキ旨ヲ答ヘタリ。

其後明治二年二月三日（三月四日）外務省ニ於テ寺島外務大輔、大隈大藏大輔及伊藤大藏少輔ト米國公使「デロング」ト會談ノ結果我方ヨリ二月十四日附同公使宛書翰ヲ以テ、樺太ハ日露兩國人雜居ノ地トナリ居ルモ不穩ノ儀出來ス可キヤ計リ難キ狀態ナルカ、之ヲ解決ニハ速ニ境界ヲ分ツコト至當ナルモ目下日露兩國共公使ノ駐劄ナク直接交渉出來難キ處、米國ハ露國ト懇親ノ間柄ニ在リ且ツ米國漁民（捕鯨業者）ノ樺太ニ來住スルモ樺太ノ所屬分明ナラサル爲不便多ク、又日米條約第二條ニ日本ト歐洲ノ一國トノ間ニ不平ノ事アルニ於テハ米國大統領和平ノ斡旋ヲナスヘキ旨ノ規定モアルニ付右境界確定ノ交渉ニ關シ米國政府ニ於テ露國側ニ斡旋セラルル様米國政府ニ傳達アリ度旨ヲ依頼シ、談判ノ大意トシテ左記各項ヲ添附セリ。

- 一、樺太ニ於テ北緯五十度ヲ以テ境界トシ同線以南ヲ日本領北部ヲ露領トス
- 一、久春古丹ハ日本各開港場ノ如クスヘシ
- 二、從來新定界以南ニ居住セル露人ハ其ノ舊居住セシム但シ地租ヲ日本政府ニ納付スルモノトス新定界以北居住ノ日本人モ同様トス
- 一、久春古丹港内護衛ハ日本政府之ニ任ス

右書翰中日米條約第二條ノ規定ニ言及セル點ハ二月十八日本書翰ヨリ削除ノ上書換ヘテ再應交付シ、尙八月二日(八月二十八日)先方ノ希望ニ依リ樺太問題ニ關スル調書類ヲ送付セリ。而シテ帝國政府ハ右事務措辦ノ爲森少辨務使ヲ米國ニ渡航セシムル手筈ヲ定メタリ。然ルニ米國ヨリ何等ノ回答ニ接セサル間ニ在清國露國代理公使「ビュツォフ」來朝シ、同人ト會談ノ結果帝國政府ハ露國ト直接交渉スルコトトシ米國政府ニ依頼スルコトヲ取止メタリ。

第二項 「ビュツォフ」ノ來朝及帝國全權ノ「ボシエト」行

一、「ビュツォフ」トノ會談

明治三年十月在清國露國代理公使「ビュツォフ」來朝シ副島參議等ト樺太境界ニ關シ會談シ、更ニ十一月三日(十二月二十四日)獨逸公使館ニ於テ副島參議及寺島外務大輔ト會見セル處「ビュツォフ」ハ、本邦駐劄ノ公使ニアラサレハ、決定的ノ談モ出來サル次第ナルモ樺太境界ノ件ハ日露兩國間ニ條約締結セラレ居ルニ付直接露國ト交渉セラレ米國ヘハ相談セサル方可能旨ヲ述ヘタルヲ以テ我方ハ、昨年ハ事情不明ノ爲米國ヘ依頼セル次第ナルモ今右手續モ分リタルニ付直接露國政府ニ交渉スヘク、米國政府ヘノ依頼及森少辨務使渡米ノ件ハ取止メ又「ニコラエフスタ」ヘ我方官員ヲ出張セシムヘキ旨ヲ述ヘ、右手續ハ在箱館露國領事ヘ公式ニ申入レ右寫ヲ「ビュツォフ」ニ送ルヘキコトニ話合ヒタリ。右會談ノ際我方ヨリ樺太境界交渉ノ基本條件トシテ、樺太ノ現狀ニテハ人心折合ハス或ハ葛藤ヲ生シ國交上ニ都合ナルニ付右境界確定ノ必要アル處、露國ハ大國日本ハ小國ニテ樺太ハ廣大ナル領土ヲ有スル露國ニトリテハ九牛ノ一毛ニテ大ナル利益モナカルヘク、天然ノ境界ヲ以テ國境ヲ定ムルトセハ黒龍江口ヲ以テ樺太全島ヲ日本領トセハ我人心モ安堵シ露國ヲ德トスヘキ旨ヲ述ヘタルニ、「ビュツォフ」

フ」ハ全島領有ヲ主張スルヤト反問シ且ツ全島ヲ日本領トセハ如何ナル代物ヲ與フルヤト問ヒタルニ依リ、我方ハ右ニ付テハ能キ様ニ談判スヘシト應酬セリ。

二、帝國全權ノ「ボシエト」行

右「ビュツォフ」トノ會談ノ結果帝國政府ハ十一月二十七日露國宰相「ゴルチャコフ」宛書翰ヲ以テ、樺太ハ兩國ノ境界ヲ立テス双方雜居ノコトニ假條約アルモ實地試ミタル處右ハ不都合ナルニ付明治四年四、五月頃我全權ヲ「ボシエト」灣ニ遣シ交渉セシメ度、右全權ニ付テハ出帆ヨリ二ヶ月前更ニ報告スヘキモ右ニ異存ノ有無回答アリ度旨ヲ領事「オラロフスキイ」經由送付シ、尙領事ヘハ「ボシエト」灣出張ノ際水先案内人雇入方ヲ申添ヘタリ。右ニ對シ露國領事ハ十二月十三日(二月二日)附ヲ以テ、宰相宛書翰ハ進達セルコト、答書ハ四、五ヶ月ヲ要スルコト及水先案内人ニ對シテハ海軍側ニ傳達セルコトヲ回答越スト共ニ、樺太ヘ境界ヲ立ツルコトハ曩ニ箱館奉行ニモ申置キタル通り露國側ハ決シテ承諾セス、右全島ノ儀ハ相當ノ代物ナクテハ交渉不調ニ歸スヘク、全權力出向クトモ露國側ハ小出大和守トノ交渉ニ基キ談判スルコト必定ナリト察セララル旨ヲ申添ヘタリ。

右樺太境界談判開始ニ關スル露國政府ノ回答ハ無カリシモ、明治四年五月十三日帝國政府ハ副島參議ヲ全權トシ、田邊外務少丞外六名ノ隨員ニ「ボシエト」出張ヲ命シ軍艦日進ヲ以テ同地ヘ差遣スル手筈ヲ定メ、田邊少丞等隨員ハ五月二十四日品川ヨリ先發シテ二十八日函館ニ到リ、「オラロフスキイ」領事ニ交渉シテ露國側ノ回答ヲ促シ、同領事ヨリ本國政府ヘ照會シタルモ何等回答ナカリシ處、七月一日(八月十六日)ニ至リ露國領事ハ副島參議宛ニ、又七月七日ニハ澤外務卿宛ニ、在函館前領事「ビュツォフ」カ日本駐劄代理公使ニ任命セラレ樺太ニ關スル交渉ノ權ヲ委任セラレタルコト及「ニコラエフスタ」

ク奉行（沿海州知事）ハ更迭シ「クロウン」任命セラレタルモ兩人共今猶歐露ニ滞在中ナルニ付本年
 中ハ交渉開始ノ速ニ至リ難キ旨通知シタリ。次テ八月二十五日（十月九日）同領事ハ、露國政府モ樺
 太問題ヲ速ニ決定シタク、日本全權ノ「ボシエト」派遣ノ意圖ニ關スル日本側ノ聲明ハ露國政府ノ提議ニ
 合致スル所ナルニ依リ東洋諸港長官海軍少將「クロウン」ヲ全權ニ任命シタリ、然レトモ同官ハ公務上
 露都ニ滞在スルヲ要シ秋迄ハ着任シ難キヲ以テ「ボシエト」ニ於ケル交渉ノ案ヲ變更シ右談判ヲ今日
 本駐劄ヲ命セラレタル「ビュツォフ」ニ委任スルノ已ムナキニ至レリ、同人ハ休暇歸國中ナルモ赴任ノ上
 樺太問題ノ談判ヲ開始セシムヘク、本問題カ兩國間ノ親善關係ニ依リ解決セラレンコトヲ信スル旨ノ
 露國外務大臣代理「ヴェストマン」ノ露曆六月八日附澤外務卿宛書翰ヲ送付シ來レリ。
 前記七月一日附露國領事ヨリ副島參議宛通知ニ依リ全權一行ハ函館ヲ引拂ヒ歸京スルコトトシ、其旨
 露國領事ヘモ通報シタル上七月二十二日歸京セリ。
 此年（明治四年）八月岩倉外務卿ヨリ太政官正院ニ對シ、露國全權來朝前其人ノ例ヲ考慮シ此際我方
 ヨリ新ニ公使ヲ任命シテ露都ニ遣スヘシトノ建議ヲ提出シタルモ實現ヲ見サリキ。

第三項 東京ニ於ケル交渉

「ビュツォフ」代理公使着任後明治五年五月ヨリ六月ニ亘リ副島外務卿トノ間ニ樺太境界ノ交渉ヲ行ヒタ
 ルカ、先方ハ從來ノ主張ヲ固持シテ島上ニ於テ境界ヲ劃スルコトヲ肯セス、而シテ全島ヲ露國ニ於テ賣
 受タルモ一方法ナリト言ヘルモ露國政府ハ右所要ノ資金ヲ有セス、然ラハ日本側ニ於テ買取ラント提
 案セルモ「ビュツォフ」ハ右ニ對スル權限無キニ依リ本國政府ニ請訓スヘシトテ交渉一時休止セリ。八月
 頃佛國臨時代理公使ハ在露佛國大使ヨリノ報告ヲ政府ヨリ内報アリタル趣ヲ以テ、露國政府及宮廷ニ

於テハ樺太ハ日露兩國間ニ爭議ヲ起シ兩國ノ親善關係並ニ大國トシテノ面目ニモ關係シ且ツ經費ヲ省
 ク爲事ノ之ヲ棄テ全島ヲ日本ニ附與スヘシトノ論アル旨ヲ内話セリ。然ルニ翌明治六年初ニ至リ
 「ビュツォフ」ハ本國政府ノ回訓ニ接シタリトテ、樺太ハ露國ニ於テ罪人流刑地トシテ必要ナレハ日本ニ
 賣渡シ難キ趣ヲ述ヘ、且ツ日本政府部内ニハ同島放棄論（黒田開拓次官ノ建議等）少カラス獨リ外務
 卿ノミ之ヲ保有センコトヲ主張スル由ナリ等申出タルヲ以テ、我方ハ佛國ヨリ聞ケル所ニ依レハ
 露國ニモ同島放棄論アリト應酬シタル上、露國側ハ島上ニ於テ境界ヲ分タス又全島ヲ賣渡スコトヲモ
 承知セサルハ畢竟同島ヲ徒手奪取セントスルモノナリヤト詰問シタル處、「ビュツォフ」ハ日本カ樺太全
 島ヲ露國ニ附與スルニ於テハ露國政府ヨリ日本政府又ハ人民ニ對シ右相當ノ利益ヲ與フヘク其爲兩國
 間ニ條約ヲ結フモ可ナリト述ヘタルニ依リ、右與ウヘキ利益又ハ條約ヲ結フコトハ如何ナル見込アリ
 ヤトノ談論ニ移リタルモ結局何等妥結ニ至ラザリシ處、三月副島外務卿ハ全權大使トシテ清國（清國
 皇帝婚賀、臺灣事件ノ交渉ノ爲）ニ差遣セララルコトナレルヲ以テ外務卿代理ノ者ニ於テ交渉繼續
 方ヲ相談シタルニ、「ビュツォフ」ハ之ヲ肯セス折角兩人ノ間ニ開始セル談判ナレハ副島外務卿ノ歸朝迄
 見合スヘシトテ分レタリ。
 恰モ此時樺太釜泊殺人事件及母子泊放火事件アリ。帝國政府ハ本事件ヲ重大視シ、「ビュツォフ」カ副島
 外務卿歸朝後直ニ談判再開ヲ促シタルニ對シ、我方ハ右暴動ニ付露國政府ハ如何ナル措置ヲナスヤヲ
 問フト共ニ、若シ日本政府ノ満足スヘキ取扱ナキニ於テハ樺太境界ニ付テモ好意的交渉ハ爲シ難キ旨
 ヲ述ヘ、結局宮本外務大臣及露國公使館屬「ヴェルニツキイ」ヲシテ實地共同調査ヲ行ハシムルコトニ
 協議セリ。

然ルニ「ビュッポ」ハ同年春清國へ轉任ノ命ヲ受ケ居リタルモ副島外務卿トノ間ニ樺太問題交渉中ナリ
シヲ以テ赴任ヲ延期シ居リタル處、副島卿辭職シ寺島新外務卿ヨリ十一月二日本件交渉繼續ノ爲出發
延期アリ度旨述ヘタルカ、「ビュッポ」ハ談判纏マル見込確ナルニ於テハ出發ヲ延期スヘキモ宮本大丞
等ノ樺太ヨリ歸着ノ上事件ノ決議ヲ待ツト云フニ於テハ延期シ難キ旨ヲ述ヘ、且ツ清國赴任後ニ於テ
モ樺太境界問題交渉ノミハ引受ケラレ度旨ノ我方申入ニ對シテモ、右交渉ノ權ハ日本駐劄ノ職ト同シ
ク解除サレタル次第ナレハ何レ本國ヨリ後任者ノ選任アルヘシト述ヘタルモ、十日ヲ限り日本政府大
體ノ趣旨ヲ承知シ度旨申出テタリ。

右ニ對シ帝國政府ニ於テハ、樺太問題ハ先ツ露人暴行事件ヲ解決シタル上境界ノ交渉ニ及フヲ適當ト
スルニ依リ、露國公使カ期ヲ定メテ副島ト交渉セントスルカ如キハ畢竟彼ノ功名心ニ出テタルモノナ
ルヘケレハ帝國政府ヨリ使節ヲ派シテ談判セシムヘシト決定セリ。
於茲「ビュッポ」ハ十二月初旬我邦ヲ去リテ支那ニ赴任シ、東京ニ於ケル本件交渉ハ斷絶スルニ至レ
リ。

第四節 樺太千島交換ニ關スル條約締結

東京ニ於ケル樺太問題ニ關スル外務卿ト露國公使トノ交渉ハ妥結ニ至ラザリシモ現地ノ事態ハ容易ナ
ラス、帝國政府ハ臺灣生蕃ノ兇暴事件及朝鮮遣使問題ト共ニ本問題ヲ重視シ、黒田開拓次官ノ建言ヲモ
採用シ、臺灣及朝鮮問題ニ先立テ樺太ヲ千島ト交換シテ樺太問題ヲ解決スルヲ適當ト認メ、本件交渉ヲ
露都ニ於テ行フコトニ決シ、明治七年一月十八日慎重人選ノ上曩ニ開拓中判事ニ起用セラレタル板本

武揚ヲ黒田開拓次官及大久保侯ノ推薦ニ依リ海軍中將ニ任シ在露公使トナシ、樺太問題及其他ノ對露
關係問題ノ交渉方ヲ委任シ露都ニ派遣セリ。

依テ板本公使ハ露都ニ赴任シ六月ヨリ露國外務省亞細亞局長「ストレモウホフ」ト談判シタルモ、露國
側ハ交渉開始ノ手續問題等ヲ云々シテ容易ニ應セザリシカ、十一月ヨリ大綱ヲ露都ニ於テ取極メ細目
ハ東京ニ於テ協定スルコトトシテ交渉ニ入り、明治八年五月七日「ゴルチャコフ」ト板本公使トノ間ニ
樺太千島交換ノ條約ニ調印シ、東京ニ於テ外務卿ト「スツルウベ」公使トノ間ニ附録ヲ協定シ、右ニ依
リ兩國ヨリ委員ヲ派シテ千島及樺太ノ接收ヲ夫々完了セリ。

第一項 帝國政府ノ方針

樺太問題交渉ニ關シ帝國政府ハ板本公使出發前明治七年三月五日左記要領ノ訓令ヲ與ヘタリ。

- (一) 彼我雜居ヲ廢シ境界ヲ定ムルコト
- (二) 樺太島ノ半分即西ハ鶺鴒城東ハ敷香ニ至ル線以南ハ現ニ我國官吏ヲ遣シ支配セルニ依リ今全島ヲ
露國ノ有ト爲スニ於テハ露國ハ右ニ釣合フヘキ地ヲ我方ニ讓ルヘシ
- (三) 得撫島ヨリ勸察加ニ連ル千島諸島ヲ以テ樺太島ノ代地トシテ受取ルヘシ
- (四) 各地居住ノ邦人引拂フト然ラサルトハ各其望ニ從フヘシ
- (五) 現在我民居住ノ各地ニ於テ露國政府ハ邦人ノ生計ヲ營ム爲從來通り地稅ヲ納付スルコトナク且
ツ一切ノ商品ヲ輸出入共無稅トスルコト
- (六) 楠溪(「クシユンコタン」)ニ我理事官ヲ置クコトヲ約スヘシ

- (七) 露國ハ「アニア」港(樺太)、浦潮、「ボシト」及「ベトロバウロフスク」ノ四ヶ所ヲ我商人貿易場ニ供スヘシ
- (八) 滿洲(沿海州)海岸ニ於テ邦人ノ鯨獵ヲ爲スヲ得ルコト
- (九) 樺太島ニ在ル我國官私ノ建物及其他ノ不動産ハ邦人引拂ノ時露國ヲシテ相當ノ代價ヲ以テ買取ラシムヘシ
- (十) 千島諸島所在ノ露國側同様財産ハ日本之ヲ買取ルコト
- (十一) 千島諸島ト樺太島ニ在住スル蝦夷人カ各政府所領ノ地ニ改メテ轉住スルト否トハ全ク彼等ノ所望ニ任スヘシ
- (十二) 各民共是迄在住セル地ヲ引拂フコトヲ望マスシテ依然其地ニ於テ生計ヲ營ムヲ願出ツルトキハ右政府之ヲ拒ムコトナシ、只其民ハ新領土ノ國律ヲ以テ支配シ其民ノ苦情ヲ舊領主政府ニ於テ關係スルコトナシ、只豫メ左ノ件ヲ約シ置クヘシ
- (十三) 從來其地ニ於テ海漁山獵ヲ營ミ來リシ兩國ノ民(他ノ外國人ヲ除ク)ニ其地(海及陸)及其建物ヲ私有スルコト如故ニシテ海漁山獵稅、地稅、船稅、銃稅、所産食物入用器具輸出入稅、島内陸地運送稅ヲ一切出サス
- (十四) 本條約布告前在各島ノ民及各政府ヨリ許可ヲ受ケ私有セル地及少々ニテモ手ヲ下セシ地ハ漁場牧場畑地及山林共ニ永世無稅ノコト
- (十五) 在各島ノ民ハ其造築家屋器具及新等ノ用ニ供スル材木ハ共ニ無稅ニテ其近傍ノ地ヨリ伐リ採テ用ユルヲ得ルコト

(二) 在各島ノ民ハ從來見出シ置キタル確證アル鑛山ハ無稅ニテ開採スルヲ得ルコト、即樺太ニ在テハ炭坑六ヶ所(「ナヤシ」、「シヨウニ」、「トコンボ」、「東白灣」、「ノボリボ」、「カシボ」)、銅山一ヶ所(西富内)ハ我民發見シ置キテ目標ヲ建置キシモノナリ

第二項 交渉ノ經過

榎本公使ハ明治七年四月十九日附ノ樺太境界ノ件ニ付露國政府ト結約ノ全權委任狀ヲ受ケ、露都ニ着任早々國書捧呈前六月二十日露國外務省亞細亞局長「ストレモウホフ」ヲ訪問樺太境界問題交渉ニ付内談セリ。「ストレモウホフ」ハ本件ニ關シテハ以前ヨリ日本ニ於テ談判セント双方申合ノ上、露國ヨリハ「ビュツォフ」ヲ全權ニ任命シテ交渉セシメタルモ副島伯ノ支那行及退職ニ依リ何等決定ヲ見ス、新外務卿トハ何等交渉スル能ハスシテ「ビュツォフ」日本ヲ去ルニ至リタルニ依リ「スツルウベ」ニ本件ノ全權ヲ委任シテ遣シタルニ、日本政府ハ豫メ相談モナクシテ突然貴公使ヲシテ交渉セシメントスルモ露帝ニ於テハ之ヲ肯セサルヘシト述ヘタリ。之ヲ以テ榎本公使ハ「ビュツォフ」ニ決答ヲ與ヘ得ザリシ事情及自分ヲシテ交渉セシムルニ至リタル次第ヲ説明シ、交渉ノ方法ニ付私案ヲ述ヘタルニ、先方ハ斷然貴公使トノ談判ヲ斷ルトイフ筋ニハ非サレハ皇帝ハ奏聞シタル上彼此研究シテ「スツルウベ」ヘノ訓令モ變更スヘク何レ懇談スヘシト答ヘタリ。依テ榎本公使ヨリ在京露國公使ノ申出ニ對スル政府ノ決定ニ付照會越シタルニ依リ、七月帝國政府ハ露都ニ於テ大綱商議ノ上東京ニ於テ談判スルコトニ露國公使ト約束セル旨電セリ。

其後八月二十日榎本公使ハ亞細亞局長「オステンサッケン」男ニ對シ、樺太境界結約及同島ニ於ケル日露人間ノ事件ニ關シ露國政府ト交渉スルノ委任狀ヲ所持スルコトヲ明ニシ、日露兩國間ノ交誼増進上

近來樺太ニ於テ發生セル諸事件ハ妨害トナルヘキモノナルニ付之ヲ除去スルノ一大手段ハ同島境界問題ノ解決ニ在ル旨ヲ述ヘタリ。

然ルニ本件交渉ハ露國側ノ都合ニ依リ容易ニ開始ノ運ニ至ラザリシカ、榎本公使ハ「ストレモウホフ」ト數回會談ヲ重ネタル後十一月十四日同局長ニ對シ、樺太ニ於ケル爭鬪殺人等ノ事件ヲ根絶スル爲ニハ雜居ヲ廢シ同島ニ於テ境界ヲ確定スルノ必要アル旨ヲ申入レタル處先方ハ、樺太ハ露人流刑地トシテ好適ノ地ナルヲ以テ同島全部ヲ之ニ充テントスルモノニシテ領土ヲ擴ムル趣旨ニ非ス、若シ島内ニ境界ヲ設ケルモ罪人ハ逃亡越境シ惡事ヲ働ケク、斯クシテ兩國國交ハ依然阻害セラルヘキヲ以テ他ノ代物ヲ讓リテ樺太全島ヲ領有シ度旨ヲ述ヘ、我方ヨリ之ヲ辯駁スルヤ島上境界交渉ニ關シテハ在日本露國公使モ自分モ共ニ權限ナシト述ヘタリ。

越テ明治八年一月二日露國側ヨリ宰相兼外務大臣「ゴルチャコフ」ノ命ナリトテ、先ツ樺太島代地ノ件ヲ談シ島上境界ノ件ハ萬不得已トキノ手段トスヘク、若シ公使カ代地交渉ニ關スル訓狀ヲ有セサルニ於テハ新ニ之ヲ受ケラレタク、露國政府ハ樺太島ノ代物トシテ幌筵、溫福古丹ノ間ニ在ル「アンフイリ」ト「海峽以南」諸島ヲ讓ル旨提議シタルニ對シ、榎本公使ハ自分一己ノ存念ニテハ得撫島竝ニ其附近三小島ト露國軍艦トヲ代物トシタク且ツ「クシュンコタン」(楠溪)ヲ無稅トスルコト及右軍艦ノ數ハ樺太島ノ値段ニ依リ定ムルヲ至當トスルモ右ニ付テハ後日政府ニ請訓シ何分ノ儀申入ルヘク、尙幌筵島ヲモ讓ラレ度旨申入レタリ。右ニ對シ一月十一日露國側ハ幌筵島ハ海軍省其他ニ於テ不承諾ナルヲ以テ讓リ難シト述ヘ、「クシュンコタン」無稅港ノ件ハ承諾シタリ。

三月四日榎本公使ハ訓令ニ基キ「ストレモウホフ」ニ對シ左記提案ヲ書キ物トシテ手交セリ。

- (一) 樺太島ニ易ルニ勸察加迄ノ千島全島ヲ以テスルコト
 - (二) 右各島ニ在ル各政府ノ動産竝ニ不動産ハ各政府ニ於テ引受クヘキコト、但シ樺太島ニ在ル日本政府附屬建物ハ百九十四棟其價七萬四千六百三十二錢、動産一萬九千八百三十三圓九十五錢ナリ
 - (三) 是迄各島ニ居住スル各民ハ十分ノ自由ヲ保有シテ其地ニ留ルヲ得只其支配(法令裁判等)ハ轉シテ新領主ニ歸スヘシ、各島ニ殘留ヲ願フ者ニハ(イ)從來ノ所有財産ニ對スル權利ヲ完全ニ保留シ一切無稅ナルコト(ロ)木材伐採權及(ハ)日本人ノ現ニ開採セル鑛山又ハ其免許ヲ得タルモノハ一切無稅ニテ經營シ得ルコトノ權利ヲ與フルコト
 - (四) 「クシュンコタン」ハ無稅港トシ日本領事官ヲ置クコト
 - (五) 露領沿海州諸港ヲ日本ノ通商航海ノ爲開クコト
 - (六) 千島及樺太島ニ住ム蝦夷人ハ去留共ニ其意ニ任スコト
 - (七) 沿海州海岸ニ於テ日本人ノ捕鯨ヲ許スコト
- 三月二十四日露國政府ハ右提案中(一)ハ承諾シ(二)ハ買取方同意スルト共ニ互ニ官吏ヲ派シテ取調フルコトトシ(三)殘留者ニ對スル特典ヲ認メ(六)ハ三年以内ニ去留ヲ決スルコトトシ(四)ハ十年間ヲ限り無稅トシ(五)ハ最惠國條款ヲ適用スル旨ヲ回答シ來ルト共ニ「ストレモウホフ」ハ條約案文ヲ讀ミタリ。
- 右ニ關シ四月十九日帝國政府ハ榎本公使ニ對シ明治七年三月ノ訓令ノ追加トシテ、(一)楠溪ニ於テハ我方輸出入ヲ十年間無稅トスルコト(二)領事館設置、沿海州四港ヲ貿易地トスルコト及捕鯨特許ノコト(三)殘留居住邦人ノ無稅特典ニ付テハ最初ノ訓令ニ基キ結約スヘキ旨ノ訓令ヲ發スルト共ニ條約締結

ノ委任狀ヲ與ヘ、更ニ四月二十日私有ノ山林、田地及漁業ノ特許等ノコトニ付テハ前以テ見据難キコトアルカ故ニ實際取調ノ上ナラテハ本條約ト爲ササルコトヲ假條約ニ書加フヘキ旨訓電セリ。右ニ付榎本公使ヨリ實地取調ノ上ニテ定ムルコトヲ別ノ簡條ニ書加ヘ置ケハ其取調前ニテモ條約ヲ批准セラ

ルルヤヲ政府ニ問合セ來リタルニ依リ、帝國政府ハ實地取調ノ上ナラテハ批准ヲ爲ササルコトトシテ條約ニ訓印スヘキヲ訓令セリ。
四月二十四日榎本公使ヨリ「ストレモウホフ」ニ對シ前記訓令ニ基キ、右實地取調完了後批准スルカ又ハ實地取調済ノ上ニテ結約スルカ此點決定セハ訓印スヘキ旨申入レタルニ、露國政府ハ現在ノ人民ハ生涯是迄所有セル特許ヲ有スルコトヲ保證シタルヲ以テ實地取調ノ件及土人ノ件ハ東京ニ於テ日本外務卿ト露國公使「スツルウベ」トノ間ニ於テ取極ムルコト及批准ハ訓印後六ヶ月内ニ東京ニ於テ交換スルコトニ話合纏マリ、五月七日榎本公使ト宰相兼外務大臣公爵「ゴルチャコフ」トノ間ニ樺太千島交換條約ニ訓印ヲ了セリ。

本條約ハ八ヶ條ヨリ成ル條約ト四ヶ條ヨリ成ル附屬公文（「デクララシオン」）ヨリ成リ、同年八月二十二日東京ニ於テ締結セル殘留兩國人民ノ所有及漁業並ニ土人ニ關スル附錄ヲ含ムモノナリ。

(一) 本條約ニハ前文ニ於テ樺太島カ是迄日露兩國雜領ノ地タルニ由リ屢次其間ニ起レル紛議ノ根ヲ絶チ兩國ノ交誼ヲ鞏固ナラシムルヲ以テ本條約締結ノ目的トナスコトヲ明ニシ左ノ各項ニ付規定セリ。
一、樺太島ノ一部ニ對スル日本ノ所領權及其他一切ノ權利ヲ露國ニ讓リ「ラベルウズ」(宗谷) 海峡ヲ以テ界トシ、露國ハ之ニ對スル代價トシテ占守ヨリ得撫ニ至ル十八島ノ千島諸島ヲ日本ニ讓リ、勸察加「ロバトカ」岬ト占守島ノ中間ヲ以テ境界トス(第一、二款)

二、本條約ノ發效ハ批准交換ノ日トス(第三款)

三、兩國ノ官有建物ハ受渡ノ掛員其代價ヲ調査シ相互ニ買受ク(第四款)

四、住民ノ殘留ハ其自由ニ任セ、殘留者ハ營業及所有ノ權利及信教ノ自由ヲ有シ新領主ノ屬民ト同等ノ待遇ヲ受ク、但シ新領主ノ「ユリスヂクシオン」ニ服ス(第五條)

五、露國ハ樺太讓渡ノ利益ニ酬ユル爲左ノ條件ヲ推許ス

第一條 「コルサコフ」(「クシニコタン」) 港入港ノ日本船ニ對シテハ十年間港稅及關稅ヲ免除ス

同港ニ日本領事官ヲ置クコトヲ認可ス

第二條 「オホツク」海及勸察加ノ諸港ニ於ケル日本船及日本商人ノ通商航海並ニ其海及海岸ニ於ケル日本人ノ漁業ハ最惠國條款ニ依リ權利及特典ヲ得シム(第六款)

六、榎本公使ノ委任狀ハ未到着ナルモ其發送ニ付テハ電報アリタルニ付右到達ヲ俟テ兩國各全權委任狀ヲ示スコトトス(第七款)

七、批准交換ハ六ヶ月以内ニ東京ニ於テ行フ(第八款)
附屬公文ニ規定セル所ハ左ノ如シ。

(二) 一、露國政府ハ樺太島所在ノ日本政府所屬建物及動產ヲ買取ルヘク右代價検査ノ基礎ヲ建物百九十四棟七萬四千六十三圓動產一萬九千八百四十四圓トス(第一款)
二、右代價ハ兩國ノ各地受取掛ノ役人検査ノ上決定シ、受取後六ヶ月内ニ露國側ノ受クヘキ代價ヲ差引キ露都ニ於テ支拂フ(第二款)

三、條約第五款ノ殘留國民ノ權利及地位ハ土人ニ付テハ東京ニ於テ日本政府ト露國公使トノ間ニ附録トシテ取極ヲ爲ス(第三款)

(三) 明治八年八月二十二日(一八七五年)八月十日東京ニ於テ寺島外務卿ト露國公使「スツルウベ」トノ間ニ調印セラレタル樺太千島交換條約附録ノ要領左ノ如シ。

一、交換濟ノ各地居住ノ日露兩國國民ニシテ現ニ其所有地ニ居住ヲ願フモノハ其ノ職業ヲ充分營ムコトヲ得、又現在ノ所有地域内ニテ漁業及鳥獸獵ヲ其生涯中無税ニテ營業スルコトヲ得(第一條)

二、右兩國國民ハ現在所有ノ不動產及其收入物件ノ所有權ヲ有ス(第二條)

三、信教ハ自由ニシテ禮拜堂、寺院及墓所ハ毀損スヘカラス(第三條及第五條)

四、土人ハ三ヶ年ノ期間ヲ以テ國籍取得ノ願出ヲナスヘシ(第四條)

(四) 批准 交換

本樺太千島交換條約ハ明治八年八月二十二日 御批准アリ翌日交換ヲ了セリ。然ルニ露國側ニ渡セル本條約日本文ノ批准條項ニ於テ「双方ノ全權明治八年五月七日彼得堡ニ會シ」云々トアルヘキニモ不拘「六」日ト誤記セルコト批准交換後ニ至リ判明セルヲ以テ、右訂正方ニ付榎本公使ハ政府ノ訓令ニ依リ明治九年一月三十一日外務次官「ギルス」ニ懇談シタル處、「ギルス」ハ佛文ノ分ニハ五月七日トアルヲ以テ差支ナク唯日本文ノ方誤字アル旨書面ヲ以テ日本公使ヨリ申入アラハ同書面ヲ該條約書中ニ挿入シ置クヘシト答ヘ本件解決ヲ見タリ。

第三項 協定ノ重ナル事項

一、殘留帝國臣民特權附與問題

帝國政府ハ樺太地方ノ儀ニ付榎本公使ニ與テタル訓令中ニ於テ、(一)樺太ニ殘留居住スル帝國臣民タル漁獲業者ニ對シ相互主義ニ依リ其所有ニ係ル土地及建物ヲ私有シ一切ノ租稅ヲ免セラルルコト(二)石炭及銅山ノ發見者ニ對シ無税ニテ之ヲ開採スルコト及(三)無税ニテ伐木スルコトノ特典ヲ取得セントノ方針ヲ示シ、明治八年三月四日ノ第六回對談ノ際榎本公使ヨリ本件ニ付提案シタル處、「ストレモウ」ハ自國領土内ニ於テ外國人ニノミ永世無税ノ特權ヲ與ヘ自國民ニ之ヲ與ヘサルコトハ世界各國何レノ地ニ於テモ無キコトナレハ政府ノ評議ヲ俟ツマテモナク自分一存ヲ以テシテモ拒否セサルヲ得サル旨ヲ述ヘタリ。依テ榎本公使ハ右ハ代地補償ノ一部ニシテ從來居住セシ人民カ領土ノ變更ニ依リ其特權ヲ奪ハルルニ於テハ政府ヨリ其損害ヲ償フヘキ必要モ生スルニ依リ從來通リトナスヘキ旨ヲ説明セルカ、先方ハ新舊民ノ差別ナク右特權ハ認め難ク、露國政府トシテモ樺太島カ自國領ニナリタリテ直ニ日本國民ヨリ諸種ノ稅ヲ取立ツルコトモ又十年モ百年モ依然無税ニテ營業ヲ許スコトモ知ルヘカラス、或ハ其地ノ繁榮如何ニ依テ稅法ヲ施行スルヤモ測ルヘカラス、然ルニ永世無税ノ特權ヲ與フル條約ヲ結フトキハ將來稅則施行ノ時ニ我國法ノ行ハレサル次第ニ付右提案ニ應シ難キ旨答ヘ、在樺太露國人ハ現在無税ナルコトヲ附言セリ。

露國政府提示ノ條約案文第七款ニハ本問題ニ關シ唯最惠國條款ニ依ル旨ヲ記載セルノミナリシニ付帝國政府ハ四月十九日ノ追加訓令ニ於テ最初與ヘタル訓令ノ條款ニ基キ結約スヘキ旨訓令シ、四月二十日更ニ私有ノ山林、田地、漁業等ニ付前以テ見據難キコトアルニ付實際取調ノ上ナラテハ本條約トナササルコトヲ假條約(批准セサル條約ヲ云フ)中ニ書加フヘキ旨訓令セリ。右ニ付前記ノ如ク露國政府ト



榎本公使トノ間ニ折衝ノ經緯アリタル結果、樺太千島交換條約第五款ニ於テ交換ノ地ニ留ルヲ願フ日本人及露國人ハ其生計ヲ充分ニ營ムヲ得ル權利及其所有物ノ權利ヲ悉ク保全スルヲ得ヘキ旨規定シ、且ツ附屬公文第三款ニ於テ各地ニ留ル各民ノ權利及地位並ニ各地ニ住ム蝦夷族ノ權ニ付テハ東京ニ於テ日本政府及露國辦理公使ノ間ニ於テ之ニ附録スヘキ條款ヲ取極ムヘシトノ規定ヲ設クルコトナシタリ。

右條約ノ規定ニ依ル樺太島殘留民ノ所有及特典並ニ土人ニ關シ明治八年五月以降東京ニ於テ寺島外務卿ト「スツルウベ」公使トノ間ニ交渉ヲ開始シ、八月二十二日六ヶ條ヨリ成ル附録ニ調印シ又同日條約モ御批准アリタリ。

右附録ノ要旨左ノ通り

- (一) 交換ノ各地ニ住ム兩國民ニシテ現在所有ノ地ニ在住セント願フモノハ自己ノ職業ヲ十分營ムヲ得且ツ其保護ヲ受クヘク又現在ノ所有地域内ニテ漁獲及鳥獸獲ヲ爲ス權利ヲ有シ且ツ其生涯中自己ノ職業上ニ關スル諸稅ヲ免除セラル(第一條)
- 又右各民ハ所有ノ權利ヲ有シ又現在所持ノ不動産收入物件及所有權ヲ證明セル證書ヲ交付セラル(第二條)
- (二) 信教ハ自由ニシテ禮拜堂及墓所ハ毀害スヘカラス(第三條)
- 土人ハ三年ノ期間中ニ其去就ヲ定ムヘシ(第四條)
- (三) 長谷部中判官ノ實地調査報告ニ依レハ從來我方カ人民ノ爲特許ヲ以テ諸稅ヲ免シ漁獲ノ權利ヲ與ヘ自由ニ其業ヲ營ムヲ得シメ居リタル漁場ハ(一)楠溪六、(二)小實一、(三)東富内四、(四)榮濱三、(四)

靜河(數香)一、二、(五)西富内一、三、(六)西白瀨ニ通計四十一ヶ所、各漁場ノ大サハ横六〇乃至六〇〇間縦一〇乃至一二〇間ニシテ、樺太ニバ我方ノ狩獵地ノ定マリタルモノナク又千島ニ於テモ右特許ヲ受ケ居リタル漁場及狩獵地ナカリシ趣ナリ。

土人ノ去就ニ付テハ樺太島ニ於テハ長谷部中判官ノ取調ニ依レハ土人ハ差向キ居留シ其業ヲ營ムヲ請フモノナク、「一心皇國ヲ仰キ即時移住ヲ請フ者八百四十一名假ニ北海道宗谷郡ニ渡航セシメタリ」、尙其他ニモ其後移轉ノ者モ有ルヘシト觀察セラレタル趣ナリ。

千島諸島ニ於テハ時任開拓使事務官ノ實地取調報告ニ依レハ露人ハ永住ノモノナク、「シムシル」島五十九人得撫島三十三人就レモ移轉ヲ希望シ、土人ハ占守島三十三人及溫瀨古丹居留ノ者ヲ合セ七十人アリ、其他ノ島ニ在ルモノ未タ審カナラス其去留モ決セサリシ趣ナリ。

二、「クシュンコタン」無稅港及同地領事官設置問題

明治八年一月二日ノ會談ニ於テ榎本公使ヨリ「ストレモウホフ」ニ對シ、「クシュンコタン」ニ在ル我漁民ノ漁獲セル魚類三十萬布度(乾魚ノ重量)アリ、之等ハ我國民ニトリ必要ナルモノニ付之カ輸出ノ爲商船ヲ同港ニ遣シ又内地及北海道ノ產物類ヲ輸入シテ以テ双方人民ノ利益ヲ計ル爲同港ヲ無稅港トセラレ度旨申レタル處、「ストレモウホフ」ハ右ハ條約ノ附録中ニ屬スヘキモノナルモ皇帝ニ奏問スヘク、又日本國民ノ樺太ニ於テ漁業及貿易ヲ爲スハ千島ニ於ケル露國民ト相互主義ニ依ルモノナルヘキヲ答ヘ、其後三月四日ノ會談ニ於テ先方ハ無稅港ト云フモ永世不變トイフ譯ニハ行カス年限ヲ定メテ改正スヘキモノナル旨及貨物中燒酎ノ如キハ沿海州諸港ニ於テ外國商人ノ勝手ニ販賣スルコトヲ禁シアル次第ナレハ大藏大臣ニ於テ特別ノ免許無キ限り無稅輸入品ニハ入レ難キ旨ヲ述ヘ、條約案ハ同

港出入ノ日本商船ハ十ヶ年一切無税トス其後ハ其時ノ模様如何ニ依リ改正スルト否トヲ決定スルコトトナリ、領事官設置ハ異議ナク決定セリ。

三、沿海州諸港開港及我領事官設置問題

明治八年三月四日榎本公使ハ朝鮮國境ヨリ勸察加迄ノ沿海州諸港ヲ我商民貿易ノ爲開クコト並ニ都合次第我方ヨリ領事官ヲ置クコトヲ提議シタルニ、「ストレモウホフ」ハ右諸港ハ西洋各國商船通商ノ例ニ準スレハ固ヨリ差支ナク、領事官設置ニ付テハ露國ハ本地方ニ英國領事館ノ開設ヲ好マサルニ依リ各國共之ヲ許ササル次第ナレハ領事官トシテハ承認シ難キモ、商事支配人（「コムマーシャル」、エゼント）ノ名義ナレハ差支ナシト答ヘタルカ、條約中ニハ沿海州各港貿易ハ最惠國條款ニ依ルコトヲ規定シ、浦潮等ニ於ケル領事官設置問題ハ決定スルニ至ラザリキ。

四、沿海州捕鯨許可問題

明治八年三月四日ノ會談ニ於テ榎本公使ヨリ沿海州ニ於テ我國民ノ鯨獵許可方ヲ提案シタル處、先方ハ從來英米諸國船ハ海岸三里以内ニ於テハ其都度地方鎮臺（官憲）ヨリ免狀ヲ受ケテ捕鯨ヲナシ居レルヲ以テ右ニ對スル關係上日本船ニ限り無制限ニ之ヲ許可シ難キ旨ヲ答ヘタリ。

第四項 交換地ノ受渡

樺太千島交換條約第三款ニ規定スル各地受渡ノ官員派遣ニ付テハ東京ニ於テ寺島外務卿ト「スツルウベ」公使トノ間ノ話合ニ依リ露國理事官（「コムミッシヨネル」）「バラバシ」大佐及文官「マチュウニン」ノ兩名ハ明治八年七月三十一日來京シ、帝國政府ハ長谷部開拓中判官及時任開拓使五等出仕ヲ右委員ニ任命シ、双方理事官ハ八月二十八日函館ニ赴キ同港ニ於テ派遣員ヲ航海等ノ關係上樺太行ト千島行ニ

分チ、樺太行ノ我理事長長谷部中判官ハ露國理事官「バラバシ」大佐、「ソロビヨフ」等ト共ニ露國軍艦「フサドニツク」ニ乗組ミ九月九日楠溪ニ着シ、翌日同艦ニテ東部沿岸靜河（敷香）迄巡航各地查了ノ上同十八日楠溪へ歸港、翌十九日樺太受渡ノ式ヲ行ヒ、夫ヨリ二十日出航西部沿岸各地ヲ經テ納城迄到リ、其結果官有建物、道路築造費、据置諸材ノ露國政府ヨリ請取ルヘキ代價合計七萬四千七十一圓餘ヲ査定シ別ニ帝國領事館用建物ヲ除キ之カ露國理事官ヘノ引渡ヲ了シタリ。

千島諸島行ノ我方時任理事官ハ露國理事官「マチュウニン」ト共ニ帝國軍艦日進ニ乗組ミ九月五日函館發同十一日勸察加「ベトロバツロフスク」ニ到着、同所地方代理官（「イスブラヅニタ」）「ボボフ」ヨリ千島諸島住民ニ付説明ヲ受ケ、同十八日露國軍艦「ガイダマク」ハ日進艦ト共ニ出航、占守ヨリ得撫ニ至ル各島巡航ノ豫定ナリシモ風浪濃霧ニ妨ケラレ只「シムシル」ニ上陸セルノミニテ根室ニ寄港シ、玄武艦ニ乗換ヘ再ヒ發航セシモ天候ノ爲其意ヲ果ス能ハス、各地ニ帝國旗ヲ掲ケテ人民ニ領主變更等ノ布達ヲナシタルノミニテ十月二日占守島、同月二十四日得撫島ニ於テ住民臨席ノ式場ニ於テ千島諸島受渡ノ式ヲ舉行シ、一行ハ函館ニ歸リ巡視三島ノ取調書ヲ作成、九月二十八日「マチュウニン」之ニ署名シ同官ハ「ニコラエフスク」ニ歸港セリ。

本條約附屬公文第一款ニ規定セル樺太所在ノ我官有建物及動産ノ代價ハ前記ノ通り最初我方ヨリ露國政府ニ通知セル額ヨリ減少シ邦貨七萬四千六百七十一圓九十一錢ト査定シ、右ニ關スル露貨十一萬二千七百五十四圓（一圓ハ一留五十一哥替）ノ額ヲ明治九年四月二十六日榎本公使ニ於テ露國外務次官「ギルス」ヨリ受取り、之ヲ以テ樺太千島交換ハ全部完結セリ。

第四章 明治初年ヨリ日清戦役ニ至ル間ノ日露 間交渉雜件

明治初年ヨリ日清戦役ニ至ルマテノ日露兩國間交渉問題中前章樺太問題及後章條約改正問題ノ外王政維新ノ官制改革ニ關スル通告、大阪及新潟開港並ニ江戸開市問題、賈貨、關稅、通商上ノ諸件ニ關スル各條約國ニ對スル同文通告等ヲ除キタル重ナル雜件ニ付本章ニ於テ概説ス。

第一節 箱館戰爭ニ關スル件

明治二年箱館ニ脱走セル賊徒討伐ニ決スルヤ帝國政府ハ正月二十二日附ヲ以テ各國代表者ニ對シ、近ク箱館ノ賊徒ヲ討伐スヘキ處外國人ニ對スル不測ノ危險及家屋什器等ノ破碎ヲ免レシメンカ爲我政府ハ外國船ヲ雇入レ同地ニ差廻スニ付什器財貨ハ之ニ積載シ人民ハ貴國軍艦ヘ暫時避難セシメラレ度旨ヲ通告シ、又正月二十八日附ヲ以テ、外國人ニシテ萬一賊徒ニ與シ又ハ彈藥糧食等ヲ輸送シ陰ニ援助ヲナスモノアラハ各自政府ニ於テ處罰アリ度旨ヲ申入レ、在箱館露國領事ニ對スル分ハ英國公使ニ傳達方ヲ依頼セリ。

右ニ對シ露國領事代理「トラフテンベルグ」ハ二月二十五日附ヲ以テ外務大輔ニ對シ、露國在留民避難ノ件ニ關シテハ露國軍艦ハ去ル十三日浦潮ヘ出航シタルニ付日本政府ニ於テ相當ノ御處置アリタク、又露國臣民ニシテ政治事件ニ參加スルモノアラハ日本政府ニ對スル親善關係ニ鑑ミ國法ニ依リ處罰方